343
751

始

特232
221

秦林日记

北京图书馆藏

自序

駿馬石磧に放たれ、蹇驢能く堂に至るなどとは、古來往々碩人の浩嘆する所であるが、徒らに勞して三史を說き浪りに自から五經を看るも亦可ならずや。

本編蒐集する所は、敢て自から俳句とも呼ばず、發句又は狂句などとも云はず、詩は志を曰ふとの意義に過ぎず。而して本編は自分が半生の事績と

宰洲句日記目次

一　ところてん集……一
二　西下百吟……五五
三　林居……六九
四　龍膽の秋……一一五
五　苔班梁塵……一四七
六　中越の三日……一六三
七　綿蠻……一七五
八　何草不黄……一八九
九　囈語……一九七

感興との一部を自己に喚起せしめば足るものである。人之を讀まば寒山子の所謂、下愚讀我詩。不鮮而嗤誚。中庸讀我詩。思量云甚要。上賢讀我詩。把着滿面笑。的のものである。若し夫れ笑我詩多失。云不識蜂腰。仍不會鶴膝。平仄不鮮壓。凡言取次出。と云はゞ予の滿足する所なり。

昭和丙子初夏

宰洲學人識

十　寢言……二一一
十一　湯泉之烟……二二三
十二　梁鵞……二五一
十三　生芯一束……二六五
十四　酒醴麴蘗……二七七
十五　松栢丸々……二八五
十六　諼草……二九三

—（目次了）—

ところてん集

（本編は隨筆「ところてん」に集錄せられたるものにて小西狷愁君の編纂に成る。依て原名を存す。）

○明治廿三年の作

初日の出心にかゝる雲もなし

正月元旦子規を駒込の下宿奥井に訪ひ、句を詠めと勸めらるゝまゝ吟じた處女作である。

○明治廿四年中の作

雪降りや雀來て喰ふ初しらげ

東風吹くや北野にかほる梅の花

梅かほる小窓は蜘蛛にとられけり

鶯や笛仕れ庵の主

鶯の聲にさしけり烏帽子影
巡禮のあと追ふて行く霞かな
ほろゝとなく雉子もこもれり朝霞
弓取りもいまは翁の餘寒かな
陽炎の向ふの岸は霞なり
いかのぼりきれて行衛や晝の月
月と梅の中に立ちたる翁あり
猿曳と瀬田の唐橋渡らばや
我庵は雉子も啼くなる朧月
春風や淡路島かげ眞帆片帆
孫も子も出揃ふて摘む根芹かな
遣羽子や昔鍛へし腕見せむ

せきにむせぶ九十九の媼や冬の夜
馬鞭一下ころりと虻の一つ落つ
眼を落す春の流れや弱法師
鳴立つてのこるもの唯破れ簑
せきれいやさいの河原を飛迷ふ
日々に朝顔の花細りけり
竹刀で試し切りする木芽かな
鶏の啄いて見るや蕗の薹
春雨に洗ひ出されし土筆かな
虻の來て棘に立つたり木瓜の花
鹿の來て燒野に迷ふ蕨かな
槍の穂に陽炎もたつ矢矧橋

矢尻にてなぶつて見たり雀の子

山吹や夜な〳〵猿の聲かなし

雁歸るあと北邙の夕烟

參宮の杖はかどらぬ花すみれ

古塚をかくしてしばし青葉かな

からたちの花や棘はありながら

蒲公英やあちらこちらに馬の糞

大刀佩いて行儀よく踐む繪ぶみかな

苗代や男が蒔きしものでなし

城あとや虎杖長く草茂る

竹垣に陣羽織干す彼岸かな

我孫に元服させて初櫻

寄居蟲や海士が忘れし荒めかご

涅槃會に乞食火宅の夢に入る

春立つや葛城山の朝日かげ

若竹に風時々のながめかな

庵室の晝まで閉ぢて氷柱かな

峠から牛逃しけり桃の花

○明治廿五年中の作　（主に「中仙道房總甲州徒歩旅行日誌」等より拔萃）

翡翠の河骨つゝく流れかな

嫁の歌始めてきゝて田植哉

茨の花卯の花まじり風かほる

畦造る男ぬりこむあやめかな

木覆盆子にはかどりかぬる山路哉

卯の花や宵闇急ぐ牛の聲

姥捨の月に見せばや鬼薊

揚雲雀どこまでのぼる淺間山

燕子花押し分けて逝く清水哉

水狗や濱荻そよぐ諏訪の湖

濱荻に釣舟とめしあともあり

卯の花に一息入るゝ山路かな

音なしに降り込む雨や夏木立

紫陽花や通りがゝりし女籠

棧に御幸の跡や風かほる

夕立に流されながら鳴く蛙

涼しさや木曾の梢の夏の月

木曾の奥木曾川細る蛙かな

山寺の籠を蛙よもすがら

棧道や山振りおとす瀧の音

杣人は野袴つけて通りけり

竹の子の見る間にのびる小雨かな

蚤に起き蛙に明けて仕舞けり

加兒川や螢打つ子に行當り

曳舟や鶺鴒追ふて上り行く

燕の水に腹うつ暑さかな

百舌鳴いて千尋の木に秋高し

初雁や泣く兒をすかす乳母もあり

野菊々々われは野菊にくみしなむ

苅株に秋を喰ひ入る稲子かな

首立てゝ鹿も聽きけり秋の聲

遠乘の手綱ゆるめて小春かな

嘘して通る人あり菊の門

肌寒や折れた薄の二三本

鎌研いて何處から苅らむ稲蓆

山門に腥味あり栗の花

秋風は稲穂を分けて來りたり

蟲の音もそよぐような花すゝき

蓑蟲も首さしだして夏の月

閏年や蚊なくて淋し墓參

柿の葉と共に落ちけり秋の蟬

啞者のしきりに笑ふ小春かな

小松積んで江戸川上る師走かな

木枯に吹き落されて夕日かな

雁群れて降りる所の人心

コッ〳〵と臼ほる人の歳暮かな

能く見れば祖父の友なり網代守

寒川や法師をのせて渡し舟

利根川や老母をみつく寒ざらし

暦賣鹿取の鳥居出るもあり

蘆苅つて聞かずなりけり五位の聲

木枯や利根吹きまわす七十里

楫消えて一番星を見付けけり
垢切れにそつと喰ひ込む寒さかな
綻をとかく氣にする寒さかな
荒波の洞に打ち込む千鳥かな
浪に散り波に集まる千鳥かな
楫の火に子守は歌ふ一つとや
燈臺をぐるり〳〵と千鳥なく
行年や犬のくぐりし垣の穴
鰯賣れて籠に太郎のいかのぼり
下駄はいて里人渡る冬の川
鯨とる男乘りだす天津風
臼になる木も交りけり冬木立

床の間の水仙淋し一人旅
德利の底を叩いて冬籠
黄か白か翁も知らず菊の苗
春の野や流れに眠る一人旅
蝶々に狂ひだしたる小馬かな
稲妻や子守女の豆太鼓
荷車の土洗ひたりにわか雨
春雨に駄馬の足の輕さかな
川一つとゞきかねたる菫かな
陽炎の消え行く所揚雲雀
乳呑兒に片肌ぬいて日永かな
夏山に朝日切りだす斧の音

炭賣りの揃ふて出たる峠かな

落角一つは見たし木賊山

千仞の瀧も若葉の雫かな

旅僧に鳴いて見せたる蛙かな

山里や三日月を鳴く初蛙

たそかるゝ野徑足遲し蛙あり

蚤虱主人の供で花見かな

一人旅粱に鼠の冬籠り

路端に陽炎を呼ぶ木瓜の花

順禮の袂にふくむ春の風

陽炎に大鐵橋もゆるぎけり

富士川や倒さまに咲く岩躑躅

春雨や稚兒酌み出づる盤若湯

○明治廿六年中の作　（主に「豆州勝遊日誌」等より撰ぶ）

烏賊舟の出たりや出たり春の月

花菫伊豆權現の鳥居前

觀音の肩に糞する燕かな

朧月や初島かけて漁舟

一人行く雨の燒山雉子啼く

荒浪を抱き込んで出る和布取り

荒波の岩に立つたる漚鳥かな

長き日や鶯をきく嶺つゞき

長閑さは河に放ちし牛に在り

口あけて牛に踐まるゝ田螺かな
夕暮に影一人行く春田かな
陽炎や蜥蜴逃げ込む城の跡
北邙の烟と見しは蚊遣かな
篝火の谷川下る夜寒かな
畦道や椿散り込む海の中
畑打の父子もどるや岨の月
所化寮の畑打つなり大男
餅つきに來るや長屋の若角力

○明治廿七年中の作　（主に「日光會津地方勝遊日誌」等より撰ぶ）

古寺の春雨をたついたちかな

蛙なく田の面を吠ゆる小狗かな
山畑の一畝うどの香りかな
蝸牛上る水棹の雫かな
空木に狸の眠る彼岸かな
歸る雁のぞいて行くや古櫓
短夜や三十六峰京の夢
小山田のあらしの跡や鳴く田螺
三日月の若葉がくれを郭公
蚕の夜一聲かなし月の雁
種芋の芽を吹く雨の彌生かな
漣や叩く水鶏のあとやさき
乞菫五反畑の朝な夕な

鶯に芋田樂の風味かな
城跡に畑打つ昔男あり
藤の花氷室の山の者語る
野の花の後を叩く水鷄かな
角落ちて今宵は鹿の月輕し
湖の夜は三更の歸雁かな
陽炎や大磐梯の雪に立つ
釣橋を中返りする燕かな
大野原陽炎も吹く風も吹く
昔吉野破陣の曲に花散りぬ
蝶一つ花の大江戸狂ひ出る
李咲き大厦傾き犬疲せぬ

菜の花の暮鞭つて女武者
鶯や老いて貫舟の奥の院
永閑さや牛大道に蟠る
菜の花や軒の陽炎皆黄なり
郭公月がしらには低ふ啼く
春風も小猿もくゞる小胎内
春雨やけふ白瀧の所々
烏啼く雨の燒野を烟這ふ
只舟に搖られてなくや行々子
春雨に叩かれてのぶ蕨かな
雪の夜は筧の音も眠りけり
雪積んで谿川下る筏かな

行春や下京で見た比久尼連
白馬の典薬のせて日永かな
山低し蛤茶屋の朧月
作兵衛の牛も角だすおぼろ月
加茂川や松風蘿月寒念佛
梅ケ香や朱雀野流す源氏節
氷解け荻芽尖ること一二寸
大潮の川に追ひ込む千鳥かな
山高く水落ち蟬の聲僧眠る
一畝はすき殘されてれんげ草
白蓮は寺一杯をかほりけり
秋近し尾上の雲の高う飛ぶ

夏木立七日山路の道さがし
風かほる野は白濱に續きけり
鈴蟲や西瓜の種の黑むころ
まだ咲かぬ荻にすがるや秋の蝶
春雨にひとりぬれつゝ歌の濱
小山田を落ちて流るゝ田螺かな
豆腐屋の門に咲きけり木蓮花
藤棚に青蛙一つ戰ぎけり
新道に一抱ある柳かな
春雨の一つ葉叩く寢覺かな
長閑さに溫鳥一二羽流れにけり
荒鷲の岩角つかむ吹雪かな

烏啼くや可惜日蔭の白椿
こゝらには鮨籠れり落水
秋なれや赤蜻蛉もきのふけふ
痩馬の何に驚く秋の暮
掛わなに鹿の飛び込む野分哉
晩稲苅る鎌に取りつくいなごかな
山蛭のわらじにたかる峠かな
古寺の燕あぶなし仁王門
神ふりし稲葉の奥や閑古鳥
利根川の左右に開く枯野かな
燈心の二三分殘る寒さかな
利根川に歳の暮れけり鯉鱠

○明治卅二年中の作　（浦港杉浦氏宅にて）

散るや紅葉河三千里水青し（黒龍江）
蔦紅葉たま〳〵木鼠の散しけり
羅漢寺の高麗張りを冬の蠅
冬に入つて歐陽修も蠅打たす
冬ざれて賣茶の翁菊をめす
二畝は寒菊植えて年老ひぬ
木枯に犬橇かける荒野かな
詠めやる村一村の時雨かな
荒海や時雨るゝ磯の藻の香

○明治四十年中の作

一月二日雪降る。四女正子假初の風邪より腦膜炎に變じ危篤なり。八日終に長逝せるを悼みて。

藥煮る音も二日の雪に冴ゆ
初雪に病む兒の手足生白し
松の内に穴掘る寺や瘤男
八日とは佛涅槃の日なりけり
萬歳も鼓をやめて歸りけり

○明治四十三年中の作

（主に「清韓勝遊記」より撰ぶ）

菜の花や白衣の翁瓦燒く
高麗の山石ゴロ〳〵と躑躅咲く

以上韓國にて

蝶追ふて廟を出づれば野糞かな

地を相し石に上れば蜥蜴かな
糞十種廟に題して日永かな

以上湯山關帝廟所感

卯の花や胡人の馬蹄輕く飛ぶ（居庸關）
絶壁や天狹うして揚雲雀（彈琴峽）
關一つ蒙古につゞく夏野かな（北門鎖鑰）
雲の峰始皇の大を嘆ずらく（八達嶺上）
麥の秋馬より落ちて轎の客（井兒店）
畑打は明の民とぞ申しけり（明十三陵）
行宮は畝一畝と麥畑（湯山溫泉）
夏瘦の京師の人も交りけり（沙河車站）
月や西江や東に風涼し（長江夜行）

涼船の灯流れぬ星落ちぬ（同上）

蓮のびて樓は吳の雨越の雲（莫愁湖）

遠征や莫愁痩せて雨十年（同上）

樂や何偲ぶ宋人荷葉の雨（同上）

老を啼く陵の鶯草深し（明孝陵）

曳舟や米磨ぐ人のさみだるゝ（杭州蘇州行）

五月雨晴や塔もゆるぎて蟬の聲（同上）

蟬百里夕立やみてまた百里（同上）

桑畑の右や左を眞帆片帆（同上）

茶禪寺の菱咲きにけり塔の影（同上）

山籠めて湖一しきりさみだるゝ（西湖）

駒とめし昔吳山の五月雨（吳山）

○大正四年中の作　（主に「遇戰閑話」中より撰ぶ）

即墨の雲夕立となりにけり

此歳主としてバルカン問題の研究に費せむが爲、歐米視察を思ひ立ち路を支里津浦鐵道線より西比利亞に取つた。即墨附近にて此句を作つたが歐洲大戰の識を爲すとは夢にも知らなかつた。

夕立や鄒人の子裸なり（孟子生誕の地）

馬を立つ泗水の上風かほる

瓢一つ賣る家もなし井のほとり（顏子陋巷）

聖廟もところ〳〵と夕立かな（孔子廟）

稻妻や泗水の東汶の西

孔子天下を小とする所雲の峰（泰山）

舜の畑打つ男あり鴉あり（歷山）

アカシヤも我も眠れり蟬鳴くに

三伏に唯高粱のそよぎかな

此夏も李白は斗酒を辭せざりき（濟南府）

哥薩克の征衣干しけり麥畑（シベリヤ沿道）

羊飼蘇武に似たるも交りけり（同上）

三百里又三百里花野かな（同上）

白き赤きげゞの花ともも人はいふ（同上）

花野より出でゝ花野に入る日かな（同上）

汗八日たゞ白き森白き蝶（同上）

せめてもや詞聖が庭に鹿飼はむ（沙翁故跡）

神風や西へ行く雲椰子の月

歸途布哇ダイヤモンドヘツトに青島陥落の報を得て詠む。

○大正六年中の作

そろ〳〵と菊の根分ける日となりぬ

此年議會終了の日、野田大塊翁が大臣室に來られて書帖に染筆を求められ即吟したのが此句である。東亞の經綸もこれからといふ際に故寺内伯は大患で骸骨を乞はるゝことゝなり、菊の芽は踏みにじられてしまつた。此頃では亞米利加でとてもすばらしい菊が咲くようである今一度菊作る翁に遇ひたいものだ。後年こんな句がある。

寒菊の葉枯れ莖痩せ年くれぬ

○大正七年中の作

（奈良にて）

大佛に一句手向けて若葉かな

鹿追ふて若草山を登りけり

繪にも句にもならぬ三笠の若葉かな

○大正八年中の作

定に入る窓もる月の寒さかな（野狐禪）

初春のメロンを小供十に切る

矢作博士農園試作のメロン一個を贈らる。家族十人してこれを賞翫す。

息災は春の春なり花の春

草鞋あむ膝に消え込む吹雪かな

雪の原眞一文字に瓢賣り

松風を今宵はきかす雪の空

捨人の我物顔に雪見かな

白粥を母にすゝめて朝の雪

殘雪や眼に入るもの皆月の影

蛤や何心なく春を吹く

極樂は西へ〳〵と吹くや東風

室咲きは何の香も實もなかりけり

梅ヶ香を鼻つんぼうのきく夜かな

痩腕と知らで喰込む蚤あはれ

雪の朝味噌する音も靜なり

灰色に雪も見えけり海の音

二三羽の鳥流れ行く吹雪かな

檢校も雪に對して句を案ず

僧に饗す雪の蕎のめつた汁

海の音遠く雪とぞなりにけり

炭竈の龍烟十丈雪五尺

鷺も來て深田の雪をかき分ける
遠近の雪となりけり窓の春
古墳累々風雪を呼ぶ夕哉

以下八句「ところてん」中「双葉の朝顔」篇中より。

朝顔はまだ二葉なり二葉なり
白薔薇の夕にひとり彌陀たのむ
花賣りと吾兒の病語りけり
撫子と知りつゝ其名たづねけり
稲妻や左は淨土右法華
夕立に打落されて青き梅
來て見れば庭の撫子凋みけり
稲妻に見ゆるもの皆青葉なり

○大正九年中の作

以下英國ファーネスアベーの廢墟にて「古寺十句」と題して詠める。

蔦からむ廢寺の風に肌涼し
古寺の窓より暮れて何の鳥
古寺や魂千年の木下闇
新綠の中に廢寺の赤う立つ
百千鳥日落ちて澄む水の音
夏草や花いろ〳〵の寺古りぬ
古寺や菊の根分けし人や誰
古寺の伽籃に我もさみだるゝ
さみだれに馬も昔を嘶きぬ

小鳥や古寺の礎苔深き

グリンデルヴアドルにて

たそがれに月漕ぐ人の影涼し

アルプスをつんざき下る氷河かな

氷河をばすべり來る風夏寒し

牛飼もまじるアルプス登山かな

鈴の音を追ふて夏山の牛かへる

暮色蒼然たゞ毒芹の花芋の花

乳賣のをのこもわれも夏痩す

雪山の麓の野花蝶を引く

麥苅るや鎌六尺の大男

米國峽谷の驚異グランドキヤニオンにて

蝶の夢に我禿山の峽を行く

夏の川奈落の底をくねりけり（コロラド河）

燕もなぐりかねたり一文字

木鼠追ふてオートの道者九を數ふ

岩鼻やとかげの足もすくむなる

グランドキヤニオンで蜥蜴をとらへ今尚ほ應接室に置いてある。

コロラドテキサス等諸州車中にて

駟も舌に及ばず電や夏の雨

西側はけふの夕立に逢はざりき

火車千里夕立を得つ風を得つ

カクタスの雨聲きく日の暑さかな

荒原に兵營兀と夕立す

夕立をぬけては逢ひつ又ぬけつ

電光の踐む所なき廣野かな

黒奴の白衣に涼を納れにけり

黒奴の唇暑し火車の旅

虹霓も貫きかぬる原野かな

鳳尾蘭原一面の暑さかな

布哇にて

小鳥めもバームハウスで涼みけり

手に取つて見れば鷄頭でなかりけり

クロトンと名づくる花あり遠く望めば鷄頭の如く白黄紅紫燦然たるものあり。

野ら牛もカクタスの角よけて行く

カクタスはシャボテンの一種なり杓子を縱横に繼ぎ合せたるが如く重疊丈餘に上るものあり。

常夏の原のしこ草もえにけり

ボーゲンヴリアなるものあり、遠く望めば躑躅の如く、稍色づけば其幹枝野茨に似たり。手に取つて見れば其花の如く燃ゆるは葉なりけり。

夏祭り酒あり名をばキーと云ふ

キーは其葉茗荷に似て莖長く土人は其根より酒を造る。

よろくと似たる槿のぼけたりな

内地の槿に類しハイビスカスと稱し樹花共に稍大に各種の色あるも熱帶地方草花の冴々した る中に一すぼけて見ゆ。

洋に寢て夢に入りけり初鰹

布哇を離れて横濱に向ふ。

○大正十年中の作

たぎる湯の音かすみけり春の風

桐の葉に隠れたりやな夏の月

あの籬朝顔まくを忘れけり

暑き夜を鈴蟲買ふて涼みけり

植かへし梅に水きる暑さ哉

鵑の鳴く音もやみて夏の月

菅笠は去年のものなり富士詣

ときならぬ桐の葉散るや暑き日に

先達も一息入れて富士詣

鈴蟲に胡瓜きる夜や月朧

明月や雨戸に一つ穴もがな

折柄の明月に風邪氣味にて引き籠りつゝ。

○大正十一年中の作

竹の子を終日數へ暮しけり

竹植えて無心無想を觀ずなる

三昧や若竹の皮ポトリ落つ

叩く雨に唯若竹の聲もなし

夏痩せの男無心の竹に立つ

夕立に鰻ぬたくる小河哉

梅雨空に經かく紙もしめりけり

友人神山狸庵竹を愛す此數句は狸庵に示せるものゝ内と覺ゆ。

○大正十二年中の作

ふぐ酒に亥年の春をむかへけり

此年の正月河豚の喰初めをなして。

卯杖をば奉る人ひとや誰

水汲に來た里の子も雪見哉

雪千鳥大海原をかけめぐる

春を待つ風情も見せて雪の笹

雪やけの女もまじる雑魚拾ひ

淡雪は三の筏を降りもせで

淡雪はやがて風とぞなりにける

孫のする墨をも待たで雪淡し

大雪や鉢の木謠になり申さず

霜解けを翁あよをき梅見かな

山畑の梅靜かなり地藏堂

氷柱越しに咲く花見たり梅や其

谷川に水音まさる梅日和

田面には月あり軒に梅かほる

隣には花の春あり草の庵

以上「ところてん」中より

いか舟やいか舟やとて浦つたひ

えぞの風に吹かれて夏を知らざりき

八月北海道に遊びて

山に水に雲かげかくす暑さかな

水鳥も唯陰たのむ暑さかな

大沼に舟を泛べて

いか舟のかゞり灯萬と申しけり

函館北海新報一萬號記念の題字を囑されて

佛無縁五輪の塔や蕗の臺

春雨や江島かけて渥鳥なく

春雨や庵の門田に五位の聲

我庵の千本松を春の雨

燒味噌の香る庵や蕗の臺

そのはては霞なりけり相模灘

神前に馬嘶くや梅の花

茶の花や太閤ゆいて五百年

宇治川やすは関の聲茶摘うた

鷲追ふ黄河の邊たそがるゝ

畑打つや猫額の地に息十息

春雨や蟹の孔あり蟹を見ず

春雨に氣遣りの女酒を買ふ

海遠く春雨近くなりにけり

春雨や化粧の水にちとたらす

苦き世を何の苦もなく蕗の臺

陸奥に蕗の下人ありやなしや

○大正十三年中の作

蓬萊をどこまでのぼる嫁が君

清浦内閣々員として親任式を畢りたる當日、某新聞記者の請はるまゝ書き與へたるものと覺ゆ。

小城趾に桃さくところ淀といふ

清浦内閣々員となつて桃山參拜淀城の舊跡を廻りて

鶯の第一聲に參宮す

伊勢大廟參拜の朝鶯を聽く

都鳥〈とて土手十里

疊堤某旅亭に小室翠雲畫伯瓢を描く即時此句を題せり

地辷りを靜かに咲くや蕗の薹

嫁入の行列見たり柿緋の里

里の子の日向ぼつこや唐からし

薄行く胡馬北風にいばへたり

銀杏の大落葉に禰宜あせす

蒲公英に三園の春來にけらし

天地海濶雁の去來に任せけり

女郎花あればまたあり男郎花

明月や孫連れてこぬ恨あり

蟲の聲涼風ごとに太りゆく

甲子の夏我睡蓮に涼を納る

七ッ子の歌のあわれ鵜のあわれ

夕日をば背一杯の瀬干かな

岐阜にて鵜飼を見て

瀧十丈孝萬年の風かほる

養老に遊びて

月に澄む寥を破つてはねつるべ

蟲の音を月に聞かばや蟲や何

月に吠ゆる犬の子までも白かりき

月段々灘の波音きこゑくる

酒を持てと云ふ大臣あり五月雨の空

清浦内閣總辭職閣議所感

○大正十四年中の作

歴山の牛の歩みや春静か

日三竿我初日の出〳〵

蓬萊やこれでも庵の主人なり

水仙に若水汲んでそゝぎけり

茶の花や武雷の神ぞます

芻蕘の人心なし梅咲くに

案山子にも古武士の風の偲ばるゝ

何事ぞ黄みも見せでちる一葉

行く年を惜みし人を惜みけり

東京に住める兄ありけり。書畫骨董に趣味あり、毎年除夜必ず來訪して共に年の市などを漁り歩行くを例とせり。此の十一月腦溢血にて長逝し今年は甚だ寂寥を覺えたり。

才藏は槍一本の主なりき

誠一貫稔らぬ秋はなかりけり

柿熟す雑木林の日面に

お露坊柿の烏を追へとこそ

京百里柿一本の秋熟す

秋ゆかむ柿買の來る夕より

柿青く水車の音に秋浅し

車窓一過コスモスも亦花なりき

松井田の里の櫻木紅葉せり

打てや打て神代打ち出せ里神樂

楢紅葉窓打つころや温泉のぬるみ

霜刀の懐に入る紅葉かな

紅葉せり淺間颪をはぐゝみて

紅葉ふむ下駄に芥のつかばこそ

風呂たきは温泉の香りとぞ申しけり

秋深き夜を痩せてゆく水の音

梢より霜滑かに染めにけり

長倉やさる神木の蔦紅葉

紅葉狩われは海拔五千尺

立寄ればたゞ櫨の木の紅葉かな

錦木は戀の染木となりにけり

手折るには百尺高き紅葉かな

鼯鼠や木の間〳〵の秋切つて

芹澤の流れを風の細う吹く

秋晴や淺間の山も裸なり

可惜紅葉折る勿れ三々五々の客

痩馬の夕暮急ぐ紅葉道

湯上りの女姦し散る紅葉

肌寒や温泉では流石に女なり

しやくつては又放ちやる紅葉鯉

細布を織る人やゝ誰秋暮るゝ

女湯も沸つて紅葉色や添ふ

女人の秋詣かや屋根供養

紅葉狩狗の子の名を赤といふ

雲を呼ぶ筆秋雨となりにけり
雲十疊絶え間〳〵のもみぢかな
秋雨に襟立てゝ遊子京に入る
五六尺飛んで興がる雀の子（教調）

○昭和二年中の作

以下十一句、「ところてん」中「阿波の鳴門」篇中より。

春の海鳴門に音もなかりけり
禿頭の一歩々々と春さぶみ
橋本は土筆の出るにちと早し
春の川昔ながらの藍の川
御社の裏に薊の盛りかな

春潮や渦をめぐりて漁舟
貫之も鳴門の春を句にし得ず
荒磯や和布苅る海士友を呼ぶ
飴しやぶりつゝ渡さるゝ彼岸かな
春の川すむも濁るも翁釣る
順禮にほう捨する門柳あり

以下廿二句、「ところてん」中「裏畑のそゞろあるき」中より。

切口は花盗人でなかりけり
花の苗犬に佛性あらばこそ
芍藥を佛に供する孝子あり
色相空なるの庭牡丹咲く
根分して畑のせまきをかこちけり

朱夏の花百日紅と競ひけり

空鉢の數だけ挿して葵あり

懶病の我れに花あり日照草

今日もまた新荷に腕を組みにけり

此石榴買ひし翁の影もなし

九年目に石榴枯木となりにけり

枯梅をば焚いて犒ふ客もなし

澁の乘る齡の男柿を接ぐ

根こぎせる梅の若木を吹く芽かな

鷄頭の首うなだるゝ暑さかな

春夜讀史一番鷄にいねたりな

父母逝けり傳書鳩などなくもかな

蟻の穴にいばりする兒は五男坊

熊笹の下に我蛇尺餘なり

五十男尙赤茄子を好き申さず

來年は花をながめむ苺畑

棘々に袖をとられて薔薇の花

よしきりは極樂寺より來りけり

七月三日堀切村なる友人の寮に涼を納る。菖蒲園附近も俗化して寮を遶ぐる葦と其南手に當る杜の中より藥屋の棟を見せてゐる極樂寺の外は句になるものもなし。

西下百吟

（昭和戊辰大典月）

大典

菊の香や大典の供奉かしこみて（六日）（供奉拜命）

鳳輦のわだちに躍る時雨かな（七日）（京都御着輦）

大典や旭さしこむ下紅葉（同　〃）（聖德及赤子）

菊の酒に八千萬の赤子醉ふ（同　〃）（萬民奉祝）

菊植えて大典の旭拜みけり（同　〃　上）

朝寒や神集ひます鈴の音（十日）（賢所大前之儀）

天照す日月の神や高御座（同日）（紫宸殿之儀）

お神樂や日蔭の蔓末霜きじ（十一日）（御神樂之儀）

菅蓋を衛士の焚く火に拜みけり（十四日）（大嘗宮之儀）
衣ずれの音折々の小夜時雨（十五日）（陛下廻立殿出御）（同上）
大饗は黒貴白貴の御杯かな（十六日）（同采女奉饌）
朝霧は鹵簿蕭々と晴れにけり（廿六日）（大饗）（京都御發輦）

奈良行（廿一日、廿二日）

幣帛あげてもどる春日の小六月（春日神宮）
化粧して大佛どのも小春かな（大佛修理成）
奉祝と鹿の三笠に書かれたり（三笠山）
御本尊も楢の紅葉に安居かな（博物館）
なき友の夫人もさびて冬籠（天理教本山）
枯枝も池の面打つ柳かな（猿澤の池）

老杉は七國あり鹿の聲（春日大典山道）
猿飛んで可惜紅葉を散しけり（同上）
溪に飲む鹿の背を飛ぶ小猿かな（同上）
猿啼いて山は木葉の時雨かな（同上）
初冬に虹を見せたるお僧かな（法隆寺消火設備成）
やかましきものとお僧の息白し（同上壁畫）
長き夜の夢アジャンダの壁畫かな（同上）

吉野行（廿二日）

御所柿の梢に高き山金剛（御所停車場）
鮎ずしや判官殿は小兵にて（吉野口）
神宮の檜もかほる小春かな（吉野神宮新營成）

長へに御門に侍る櫻かな　（士居得能二氏之靈）

數畦の櫻の若木落葉せり　（皇居跡）

木枯も上吹きぬけて鬼面佛　（藏王堂）

碑を撫せば苔に露あり吉野山　（村上義光之墓）

御座越しに如意輪堂の紅葉かな　（吉水神社）

小男の鎧も共に山眠る　（如意輪寺）

辨慶の釘さす跡や苔黃ばむ　（同上）

櫻木に役の行者は殘りけり　（同上）

梓弓元帥の涙時雨れけり　（同上）

椎の木を唯賴めとてお陵かな　（延元陵）

太閤の花見の跡や草もみぢ　（雜）

白紙子着つゝ立つたる櫻かな　（吉野櫻）

葛菓子を噬む三芳野の寒さかな　（櫻花壇）

藤の根も吉野の葛となりにけり　（同上）

湯婆に寢て汗かける吉野かな　（同上）

（廿三日、廿四日）

高野行

幸村の血も通ひけり寒椿　（高野口、九度山）

女神に丹生の氷魚を奉る　（同上）

極樂は一里上なる小春かな　（極樂橋）

冬の日の通りかねたる靈地かな　（登山）

氷には一夜遲れて登山かな　（同上）

深山苔鬻ぐ媼や晝の月　（同上）

籠捨てり山樒をば摘まんとて　（同上）

隼の引返したる索道かな　（高野索道）

天も地も紅葉にもゆる巨渓かな　（紅葉谿）

絶壁は方十町のもみぢかな　（同上）

もみぢ葉を蹴り上げのぼる兎かな　（同上）

女人堂にたゞ松風の時雨けり　（女人堂）

霜どけに足駄は僧に穿かれけり　（雜）

霜解けに靴底あよをき外道かな　（同上）

女人も交る高野の小春かな　（同上）

爐の間にて對坐する僧八十六　（金剛峯寺）

夜を寒み老僧寫經二萬卷　（同上）

空海か經よむ跡や枯薄　（炎上之跡）

金堂は五度燒けにけり霜柱　（同上）

大師忌に御堂建立急ぐなり　（同上）

石室の寒さにかへる本尊かな　（同上）

水鳥や燒け殘りたる不動堂　（同上）

十町は古墳なりけり冬木立　（奥之院）

露氷る杉百丈の星あかり　（同上）

苔八宗陸奥殿もあり薩摩どの　（奥之院古墳）

惟任は寒さにかげてゆきにけり　（光秀古墳）

玉川や尼連禪河の川時雨　（奥之院玉川）

空海が經かく橋の霜夜かな　（奥之院）

太閤の靈雨にぬるゝ寒さかな　（同上）

鐘さゑて敵も味方も佛かな　（奥之院豊公征韓日韓戰死者供養之碑）

法力の王者を拜む襟さむし　（大師之墓）

寒雲に大師の錫の音すなり　（同上）

唐土までも千鳥追ふ僧年三十　（同上）

魂不滅燈籠堂に月寒し　（奥野院燈籠堂）

千年の傳燈細く鐘氷る　（同上）

寒月に異人も鉢を洗ひけり　（奥之院洋人墓）

歸り路の玉川邊や冬の月　（奥之院歸路）

雲邊に吠ゆる月あり彌陀さむみ　（同上）

住職の眉毛に長き夜寒かな　（遍照光院）

さむ空の朝汲んで出る般若湯　（同上）

百坊や郷僧二人冬籠る　（同上）

精進の一日は紅葉散りなまし　（同上）

參詣は高野豆腐にちと早し　（雜）

泥牛や高野に蕎麥を苅るならむ　（同上）

舍利堂に粟一粒の天地あり　（同上）

霜枯れて神も佛も杓子かな　（同上）

雛僧も珠數賣る門の月に呀ゆ　（同上）

枯尾花法衣に包む高野かな　（同上）

雜

橋に立つて見上げ見下す紅葉かな　（十二日）（高雄山紅葉）

紅葉せり清瀧川は痩せにけり　（同上）（同上）

先づ流す清瀧川の若紅葉　（同上）（同上）

時雨るゝや和氣公眠る山閑か　（同上）（高雄山神護寺）

土器は紅葉をよけて投げにけり　（同上）（高雄山地藏谿）

かわらけのひらり〳〵と紅葉かな（同上）（同上）

鹽釜や河原の院の冬籠（十七日）（枳殻邸）

病老死の三筋に落つる瀧寒し（廿日）（清水音羽瀧）

紅葉ふんでさる女蘿（ら）の祈念かな（同上）（子安塔）

女人のぬかづくあたり散る紅葉（同上）（同上）

夕日照る紅葉紅蓮の火宅なり（同上）（清水白雲居）

心木には長嘯子あり川時雨（同上）（東山靈鷲山莊）

蒲團着て寢たる姿をねたりけり（同上）（同上）

初冬や太子もけふは御衣かけて（二十日）（太秦廣隆寺）

白さびや六角堂の霜の聲（同上）（同上）

長髯の冬の日浴びて太子かな（同上）（同上）

參拜や寒月照す馬場右近（同上）（北野天滿宮）

名木の名殘なりけり紅葉茶屋（廿二日）（龍田川紅葉）

吟成らすもみぢ葉淀む龍田川（同上）（同上）

千年の昔にかへる若紅葉（同上）（同上）

親子して小春の舞や月こよひ（廿五日）（東庵別邸）

寒月や鬱々として森の音（同上）（同上）

林屋

此夏から秋にかけて、沓掛附近に廿日餘り、東山に亦廿日餘り、林居すること前後四十餘日。淺間押出しに天明の熔岩を觀、小諸へ天龍の鰻を喰ひに出掛けた外は、毎日蠅や虻や蛾と戰ふのが重な仕事であつた。此の間句を以て日誌に代へたものが積んで數百となつたので、琢句と駄句の篩ひ落しに、便宜上印刷してみたのが是れである。

宰洲道人

昭和己巳仲秋

還暦や眉毛一莖の白きより

林居

裾野來て花かきつばた今やなし（書生時代の草鞋旅を回想せり）

柴門は薄閉すに任せけり

肌寒や烟淺閒の朝なゆふな（起きては先づ淺閒を仰ぎ床枕に入る前又淺閒を見る）

鶯も不老經よむ裾野かな（終日鶯庭園に來り鳴く）

此夏は腰の痛むを覺えたり（草刈り昔日の如くならず）

夢の世を蠅打ち蛾取り暮しけり

蒼蠅に華胥の境を覺り得つ

高原をたまたま雹の夕立かな

夕立に疊揚げけり晴れにけり

雷隱々く膝に飛び込む孫もあり
（京都より七歳の孫來り住む蠅打の相手なり）

腰折つて雨通しけりひよろ紅葉
（楓竿幹にして數丈に達するものあり）

迅雷に潑墨淋漓と躍りけり
（此時より書風を一變せり）

夕立や淺閒は霽れて虹碓氷
（虹蜺の同時に立ちたるを初めて見たり）

虹蜺二つ碓氷の雨を截つて立つ
（雄を虹と曰ひ雌を蜺と曰ふ）

虹と蜺と一所に見たり離山
（雄を虹と曰ひ雌を蜺と曰ふ）

雲の峯淺閒と肩を並べけり

蟲の音よもすがら鶯に明けにけり

狸棲む林居を射たり夏の月
（狸を見たと云ふ者多きも道人は未だ見ず）

腕のべて螫されし虻の痕や見む

鴟の晝を啼きけり樅林
（林居樅多く圍六尺以上のものあり）

郭公烏明神の月に啼く
（烏明神は香掛在の氏神なり）

夕立は立石淺閒碓氷より
（香掛の地勢たる南に立石山西に淺閒山東に碓氷峠あり）

圍菜に跳ねかへりたる雹の音
（圍菜は香掛在の主要物産たり）

野芹から滓されて出たる清水かな
（東山に清水あり汲んで飲料とす）

八十尾池に放つて小鯉かな

槖駝師も狸を見たり木下闇

三伏に鄙居の詩あり誦しけり
（三籟集を讀む）

鄙居山居水居船居の晝寢かな

大隱は居もなく夏もなかりけり

龍神も暑さにくねる釜が淵
（香掛湯川あり河流淵を爲し岩石悉く竈の如く刻れて人工を施せるものゝ如し奇觀なり）

兜山の錏摑むで汗知らず
（離山一名兜山と云ふ其形兜の如し草庵は其の南麓林中に在り）

暑百度鎖ざすひまなき氷室かな
（香掛天然氷の産地なり）

夕陽に血を吐く蟬の浅閒かな

糸萩は苅り残されて折られけり

鵙鳴くや耳を捲ふたる疳の人

鵙取り居らず
（鳥も氣樂なり）

缺も來て足下に蟲を漁りけり

けばけばし林居に入つて鳳仙花

夕立に桔梗倒して仕舞ひけり

火車一過しきりに起る百舌鳥の聲

夏の雨草苅る鎌の重げなり

たそがれて霧吹きまわす碓氷かな

霧は土地の名物なり忽然として起り又忽然として消ゆ

霧の鳥塒に歸る道絶えて

霧籠めて忽ちやみし鳥の聲

霧の海に淺閒小淺閒沈み行く

霧雨に檐の蜘蛛の巣光りけり

大霧や終日庭に鵙を見ず

此霧に飛鳶墮水の詩ありけり

霧鎖す林居に樅の香高し

（林居の經驗なきものは此の香をきくことなし）

霧深くなるほど高し水の音

大霧に流されて行く蝴蝶かな

山居して朝夕霧の訪れり

霧の夜の踊の大鼓懶と打つ

（盆踊りも濃霧の爲振はざりしが如し）

火取蟲燈下に浴衣脱がしけり

草苅つて蟲の音遠くなりにけり

夏痩を今年溫泉痩と申しけり

（夭男萬座溫泉より來る）

あぜ路に月踐む宵や秋近し

野の花は千種の花と名付けばや

こつこつと戸を搗く蛾や夜の雨

穂に見むと苅り殘したる薄かな（薄は仕合ものなり）

蠅の減る頃まで捨てぬ團扇かな

駄馬來ぬ日から虻の音減りにけり

豪雨徹宵缺一聲に霽れにけり

月見よと都のたより衣かづき（在京友人より衣かづき贈らる骨躾深かし）

蟲の聲淺閒も黑く澄みにけり

蟲の聲に浮いて見えけり淺閒山

明月に後れずと出る薄の穂

手折るには泥百頃の澤桔梗（杳掛の南郊澤一面に紫なり）

月を得つ蟲の聲きく林居かな

裾野をば千種の蟲の聲すなり

秋風に蛾は皆月に朝しけり

杖に憑て蟲の聲聞く座頭かな

月に對し無想の吟や蟲の聲

秋晴れに山近きこと百歩なり

草苅や三日は汗の三斗せり

いつまでも月に寢られぬ夜寒かな

蔓卷く梢にちらと初紅葉

苅り殘す薄や月の十三夜

殘月や淺閒颯のよもすがら

苅れば苅るほど一ぱいの蓬かな（蓬寸餘一面芝生の如し）

月や西雲は碓氷に風凉し

苅る興に鎌を入れたり八重葎
鎌置いて引張つて見る金剛草

秋なれや淺閒の烟低う這ふ
門燈の蟲に飛びつく青蛙

天雲に初めて聞くやゝ鳴く蛙
噴烟のむくむく上る大暑哉

我杜に山人蔘も生えにけり
（藥草ありて林居樂むに足る）

大霧の中に林徑十歩なり
老樅や流石に蟬の居り所

池掘つて鵜鶘來ぬ日なかりけり
（庵立つて鳥山に入るもの多きも鵜鶘の來る多し）

明月も野山も籠めて霧深し
十五夜の月は霧とぞなりにけり

堰とめて音秋を帶ぶ清水かな
蟲の音も清水の音に消されけり

林徑を一歩一憩蟲の聲
バラス踐む音にやみけり蟲の聲
（バラスは火山灰にて砂利に代用せらる）

淺閒吹く風は稻穗の波立てゝ
我庵は稻の波寄す汀にて
（稻田翼々其果は淺閒山なり）

稻の花庵一杯に香りけり
山居して月見むとすれば雲を看る

夜三更霧なほ深く月を抱く
大霧に草苅蚋に螫されけり

大なる哉霧月も尾花もなかりけり
禪僧の書幅をかけて月に代ふ

蘭切る剪刀落しけり拾ひけり

林居して清水に磨ぎし飯の味

大霧も清水の音を包み得ず

朧月搜しに出たり杜はづれ

老樅の梢や朧月ならむ

昨日から淺閒も見えず月もまた

十六夜は朧ろに月を見たりけり

枝垂れ生る胡桃は人に取られけり

栗の實の落ちて栗鼠飛ぶ一丈かな（栗鼠多かりしも庵立て今や稀に見る）

桃色にげんのしようこも咲きにけり（ゲンノシヨウコ一名みこし草花桃色のものは長三尺に及ぶ花白きものは二尺に達せず腸胃に特效ありと人の云ふに任せて摘まむとすれば庵を繞つて殆ど無盡藏に生えたり）

樹透しに淺閒に對し虻を打つ

池に挿す眼皮根を張り鯉躍る（岩菲俗に眼皮とす）

葦の穗も出たりな月は雲の中

龍膽を折添へて來る樵夫かな（山中龍膽の花あり茶人の好むところ多く東京に行く）

源は野芹の隱す清水かな

芹苅つていよいよ肥る清水かな

林徑に立待つ月は朧にて

淺閒晴れ立待つ月も得らるべう

袷着て立待つ月を待ちけらし

月見ずに東に歸る人無心

清水聞く蟬の林の清水掘り

來年は草に見るらむ日照草（土屋君來り階前に數種の松葉牡丹を植ゆ）

朧月さす杜の夜をきりぎりす

夜の蟬無名の鳥の如く鳴く

堰かへて清川の音まさりけり

芹澤の末清川と呼ばれけり

獨逸から種おろしたる野芹かな

林居にも雨戸ありけり月を外

三更の夢に入る月十七夜

窓に映る枝の動きの夜寒かな

月明の夢立待の夜半かな

あの蟬も生死の境を鳴きにけり

不老草掘る人哀れ月さやか

極樂の余生幾何ぞ月地獄

水の音に浮世の汗を洗ひけり

曉方の厠に上る月居待

鼓子花や落葉松の立枯れて

黄雀風淺間裾野を吹き上る

清川や藻の花流れながら咲く

あの足で大波紋かく水すまし

豊年に山田の菽も實りけり

林居して今年は折らず忘草

蟹來る今宵や雨となるならむ

來年は聽きに來るぞよ杜字（杜鵑の節に後れて林居せり）

鑢虫鳴く夜は聞かず水の音

林居の夏先づ訪づるゝ鼠殿

朧なる居待の月を霧隠す

乘合も霧の里道を徐行かな
霧來る淺間の山の裾野より
林居して霧の香をきく夕かな
水の音に堰の氣になる夜半哉
熊蜂の古巣に噪ぐ童かな
虫の聲やむ時水の音高し
霧の海なれや水音まさるらむ
巨眼あり霧の海をば來往す
水の音は絶ゆるひまなし眠りけり
老樅の枝段々と月上る
甥の來て社會相說く苦熱かな
面白う清水渫へて悟あり

霧去つてまた來る大蛾小蛾かな
聽きにけり隣の杜の雉子の聲
恐しと雉の聲聞く非僧かな
低う飛ぶ羽音や雉にありつらむ
雛引いて追へども立たぬ雉子かな
雉啼いて端あらたなり我や健
雉子遠く綠野の寒さ啼きにけり
百舌鳥といふ鳥あり舌の人多し
鳳子にも似たる蛾も來る林居かな
苦吟の夜蟋蟀堂に上りけり
月淡く蟋蟀の聲かすかにて
蟋蟀を朝掃き出してしまひけり

娟々と伏待つ月を見たりけり

蟪蛄の虻に喰ひ入る林居哉（山地蟪蛄多し）

十九夜の月出でたりな待つ久し

此秋は栗を拾うて林居かな

聞ならく栗喰ふ翁腰病まず

栗拾ふ頃茸も出む庵の杜

貞任の腰圍にまけぬ樅實あり

雲ぬいで夜半の月の寒からむ

伏待の今宵の月の肌寒き

月明や稲穂の霜にちと早し

蘇東坡も寒に堪へざる月今宵

我庵は淺閑に向ひ月を脊に

山の秋月を得てから立ちにけり

仰げば月伏せば月あり池十坪

澤瀉や稲田の畦を白う咲く

枝も葉も花も澤瀉三筋なり

澤瀉を池の汀に移し見る

明日はまた澤瀉掘つて瓶に見む

八つ手かと見れば棘あり木の名せん

たからかう處々に葦を咲く

（たからかうは水邊に生じ其葉蕗に似花はつわぶきに似て圓錐狀に開き高さ六尺に及ぶものあり）

芹澤の源を咲くたからかう

たからかう庭に移して花を見ず

花なくば山蕗と見むたからかう

たからかう鎌倉殿の鶴を狩る（頼朝草津に湯治するの途次此地にて鶴狩を爲す）

鶴溜りから種落ちてたからかう

御陣屋の跡や草餅賣の住む

尿せむと庭に下れば亥中月

思ひきや廿一夜の月窓に

草取つて根瘤に蟋蟀（すだ）啣きけり

水聲に蟋蟀笛をかなでつゝ

清水掘り五葉躑躅に憩（いこ）ひけり

（五葉躑躅一名しろやしほ淺閒山にて尺餘のものを採集せり我杜に在るものは丈餘あり）

半日はみこし草つむ翁かな

東西に水聲を得て庵清し

みこし草葦六尺の上に咲く

月見むと先づ酒搜す寒さかな

たまに見る山田の蜻蛉痩せにけり

棒頭に眼あり蜻蛉停々と

床枕に親しむ水の秋の音

啾々と蟋蟀鳴く夜七十度

苔徑を辿る足下の螢老ひ

川越えて向ふの杜は螽蟖（きりぎりす）

秋風は淺閒山より立ちそめて

霧を出て廿三夜の月霧へ

寢衣着て露徑に立つや眞夜半月

人籟寂として水音に出る眞夜半月

眞夜中に兎嵐（あらし）から覗きけり

月なればこそ廿三夜も惜まるゝ

月も見ず夜漫々と更かしけり

鞭うたば雲重々の月出でむ

霧去つて露稲穂をば綴りけり

露清く畔の下草紅葉せり

犬蓼の葉も染みにけり今朝の露

清水から揚げて西瓜の殘暑かな

栗の木は六尺圍り實細る

畔毎に釣舟草の黄に紅に（釣舟草多くは紫色黄色のものは少し）

乳茸は喰へるといふて捨てにけり

蔓藤は葦を上りて下りて咲く

野路行けば釣鐘草の露重し

瞑林に入つて秋風聲もなし

秋色を鐵條網の扉に鎖す（扉自ら造る）

尾花吹く風力なし客老いぬ

病翁も秋の胡瓜の皮とらず

秋の來て庵から翁誘ひ出す（以下五十四句押出行）

分去の茶屋下る原小松ひね（同上）

赤松の杜白樺に秋を見る（同上）

馬の秋六里ヶ原も廣からず（同上）

薄路折々覗く石地藏（同上）

すゝきをば拔いて咲きけり獨活の花（同上）

虎の尾は薄を跳ねて二尺咲く（同上）

岩かゞみ踐んで淺閒の裏見かな（同上）

押出しや先づ山うるし押し分けて（同上）

熔岩を葡萄便りに上りけり（淺閑葡萄と稱するもの蔓なく其實赤巖生せず）（同上）

杉苔を折敷いて說く噴火かな（天明の噴火を說く先生あり）（同上）

白人の岩片拾ふ殘暑かな（我は苔を採り白人は岩片に興を持つ人情の異る處を見る）（同上）

押出しや千石萬巖亘る秋（同上）

白苔の熔岩鎖す貳百年（同上）

石楠花に非ずおもだか岩に這ふ（同上）

岩上の漆樹寸にして紅葉せり（同上）

飛び下りる萬年杉に迷ひけり（同上）

悲哀蕭條六里ヶ原に籠りけり（同上）

荒原や桔梗女郎花色冴えて（碓烟の地花色却つて鮮なり）（同上）

累巖の頭叩いて瀧五丈（押出に到るの途次石止瀧あり人多く遊ばざるも清遊の値あり）（上同）

たからかう溪を埋めて地藏川（壓岸のたからかう他に其景を見ず）（同上）

十丈の紅葉日にすく瀧の音（同上）

瀧寒み園丈餘の枯木かな（同上）

溪に架す橋もゆるぎて瀧の音（同上）

千仞の秋を湛えて瀧の音（同上）

押出に膽消す人の瀧見かな（同上）

蜜と地梨名產候よ吾嬬茶屋（同上）

分去の茶屋から虻も馬追はず（同上）

小淺閑を左に見たる荒野かな（同上）

小一里は秋凄涼の燒野かな（同上）

燒野にも虎杖の花咲きにけり（同上）

新凉や水汲みに行く野路一里（同上）

硫黄たく萬座の山に秋深し（同上）

方六里秋草咲くも蝶を見ず（六里ケ原殆ど生物を見ることなし）（同上）

原頭に秋を嘶く馬群あり（唯若干の放馬を見る）（同上）

初秋に淺間の裏は秋暮るゝ（同上）

碍烟に六里ヶ原の草黄ばむ（同上）

熔岩の隙間吹き拔く秋の風（同上）

地祇怒るとき人力や秋の蠅（同上）

押出や淺間燒野に雉子鳴かず（同上）

短僮の地梨取りつゝ齧りつゝ（同上）

秋風は上を吹きけり地藏谿（同上）

ぐらぐらと岩搖ぎけり命苦（同上）

秋晴れも淺間の空を鳶舞はず（同上）

峠から黑一點の庵の秋（同上）

虹なすに木立くぐらし瀧しぶき（同上）

對岩の男叫んで瀧の音（同上）

六尺をゆたかに咲いてたからかう（同上）

老楓に卷尺あつる童かな（同上）

十丈を仰げば天は楓なり（同上）

駄句書くも風流子なり瀧の音（同上）

小茶屋はと見れば大蜘蛛小蜘蛛かな（同上）

石に架す橋五つから瀧の音（同上）

樅を杖に榧の老木苔白し（同上）

南窓の障子に重し秋の虹

星月夜宿の灯にまでつゞきけり

蛾來ぬ日から山翁も庵閉ぢむ

碓氷から出てくる人の紅葉かな

蟲けらも朝露の悟開きけり

酒抱いて紅葉山より歸りけり

秋風や水車の音の枯れやせむ

紅葉初め池にも放つ緋鯉かな

乾したりなみこし草見て嘆ずらく（自ら採り自ら乾し自ら嘆ず）

みこし草花の白きも摘みにけり

みこし草葎這ふこと二三尺

みこし草乾くを待つて下山かな

長倉の秋を清めて湯川あり

秋風は水の音をも吹き去らむ

林居して尙物乞の秋淋し

鑣虫一夜一夜に遠く鳴く

蟋蟀は尙庭にある殘暑かな

賓あれば淺閒の裏の秋語る

葎から花丈出してみこし草

みこし草提げて迎ふる京の客

放ちやる蟋蟀また堂に上りけり

紅葉苗植ゑつゝ鮨に呼ばれけり

紅葉堀若芽老根汗淋漓

畔行けば花みなみこし草なりき

朝霧や二百十日も無事ならむ

鮨喰ふて急に煎茶を探しけり

まぐろ鮨林は未だ紅葉せず

家内して鮨に團樂はる殘暑かな

花摘みに林徑行けば雉子の立つ

大鯉の行くに任せて小鯉かな

雉子立つてまた我杜に下りにけり

水に伏す紅みこし草摘まざりき

澤瀉をまた瓶に挿す殘暑かな

人蔘と知らで老僕花に苅る

人蔘なし仙子けふより道骨枯れむ

三萬里飛んで鵾鵬秋を知る

林居逍遙たま〳〵蝶を忘れたり

秋風の窓吹く音や空々々

鬢の霜なでゝ黄庭書く夜哉

秋草あり花作る翁なくもがな

（都より花作る翁來り住み西洋花等を作る實に美事なり）

鄙に蒔く京の撫子色まさる

又訪はむ秋に横たう淺閑山

庵在々樂いかな處々の秋

漆樹から先づ林をば染めたりな

そろそろと黄ばみ初めけり楢林

植替へし紅葉三日は枯れもせで

避暑客の引上げ初めて貉出づ

紅葉山に狸の出ると云ふもあり

墨磨りや或時無我の秋靜か

山羊飼ふてまた來る夏の茶を飲まむ

書の夕清水に筆を洗ひけり

筆洗ふ岸の澤瀉染みやせむ

兀座して秋の聲聞く夜寒かな

秋空や淺閒紫に野黄なり

宿の灯の消えて琢句の夜寒し

迫分を下れば蕎麥の花白し（以下九句小諸行）

迫分を西に咲きけり吾妻菊（同上）

傘さして山田の案山子涼しけれ（同上）

山田來て案山子にさわぐ童かな（同上）

錦木の紅葉初めけり鰻裂く（同上）

小供には當らぬ筑摩川の鮎（同上）

鳥の數ほど狹山田の案山子かな（同上）

鮎の香や秋尚若し筑摩川（同上）

天龍の鰻前十年の風味かな（同上）

噂して歸ればやまべ贈らるゝ

（「やまべ」又は「やめ」と稱し多く溪に住む鱒の幼魚ともいふ）

本間殿より金鱗のやまべかな

大なるは八寸もあるやまべかな

嘗て池に釣りしはやまべなりけりな

秋の夜を先づ風味するやまべかな

灯を提げて行けば清水にやまべかな

やまべ打ち隣は村の一人者

みこし草去年には名無き花なりき

みこし草花の白きは踏まれけり

電燈の消えて露臺の夜寒し

電燈の消えて氣になる蛾の行衛

やまべ燒く香流石に林居なり

鼠亂やむ時から貂の棲みにけり

山躑躅植ゑて降りけり秋の雨

稚楓植ゆる廿五本と注しけり

雷の三聲殘して秋の雨

路草の白塵流がす秋の雨

みこし草摘む原またも見付けたり

秋霖はやがて茸となるならむ

明日はさて茸狩せむ秋の雨

秋なれや野の草雨に香ひけり

雨を得て釣舟草の盛りかな

雨晴れて娑婆相を鳴く蛙あり

秋雨に小池の鯉も濁りけり

雨やむで一廻り見る稚楓かな

筆を援いて墨の乘らざる雨の秋

入塵の日も近づくや秋の雨

秋雨や林窓すでに葉聲す

翼々と稻田は雨を欲しげなり

葉聲は秋雨連れて來りけり

秋雨に打たれながらの穗の戰き

涼負ふて歸る客あり秋の雨

高原の秋くつきりと雨後の晴

林居して豆花の雨の寒さかな

雨晴れて二聲三聲秋の蟬

露結ぶ頃稲を苅る山田かな

高原に雁來紅を見ざりけり

山居して今年は聞かず雁の聲

夜の雨林居の窓に秋を搖く

落日の秋帶び歸る我鳥

淡く降る秋雨なれど散る木の葉

秋を鳴る鐘一つなし里の寺

秋曉や草苅る男後れたる

からむ木と共に切らるゝ紅葉蔦

苔黃ばむほど降りもせぬ秋雨かな

山里も砧は歌に殘りけり

雨を得て書三昧に入るの秋

厚朴の葉の雨や砧の韻ならむ

切られても枝尺にして地梨あり

雨後の杜素女の聲鳴く蟬もあり

秋光にやすみつ舞ひつ白き蝶

秋雨の夜を鳴く虫を蚯蚓とぞ

秋雨に泥跳ねあげて庭たゝき

秋雨に鴉ひねもす林居哉

夜通しの雨に清水もちと濁る

まてしばし秋雨晴るゝ日に立たむ

扉鎖ぢて色紙に向ふ秋の雨

人生を十年越して雨の秋

黄葉に詩趣の出たる鴉かな

孝鳥の餓に啼く杜や秋の雨

笠の秋聲は葉の音雨の音

秋雨に爐を焚いて見る寒さかな

秋雨にぬれて薪の火を爲さず

爐を焚いて秋の夜寒を語りけり

落葉のけて堰の水音さらりさらり

水渇るゝ頃秋雨の降りにけり

薪ぬれて秋炊く飯の後れたる

孫去つて淋しさまさる秋の雨

稲の穂のみのり摺り行く傘の秋

たそがれて畔の澤瀉目立ちけり

雨に來て夫人も杜の秋語る

澤瀉は前の稲田に返しけり

雨細り水の音潺々翁眠る

雛鶏の羹あり秋の夜長し（客あり雛鶏を贈らる舌を鼓して骨をしやぶる）

雨凉の夜薪拾ふと思ひけり

山の秋に背いて京の人歸る

山の秋馬頭觀音の額に暮る

裏山は馬越の牧の秋なりき

聖代や馬喰の宿に稲みのる

振分けに馬腹の客や溫泉の夜寒

爐をたいて螫さぬ蚊の來る夜半哉

がらす戸に腹を見せたり青蛙

静中の動三尺や青蛙

林居四旬都の秋をまたやせむ

坐臥終日肩の凝病む秋の雨

嚢底の秋詩に更かす夜の雨

秋雨を楢の木ともに焚きにけり

釣つてまた放つ小鯉に秋を知る

唐松の葉落ち小淺閒山高し（唐松は落葉松なり）

杜に咲く虎の尾畑に垂れにけり

雉子立ちし同じ桑畑踐んで見る

老樅の鐘や撞くらむ蜂の聲

三日して熊蜂の巣も出來にけり

雲淺閒小淺閒のみぞ惜しむ秋

紅葉にはまた會ふ別れ惜みけり（秋雨の夜土屋君父子挨拶に來る）

昔語る陣屋の人に更くる秋

秋曉や骨かむ音に起き出でゝ

翁去つて秋掬すものの秋ならむ

人生の秋を照して月さやか

霜置かぬ前に固まる團栗かな

石弓に稲田の雀追ひにけり

菅笠に秋の聲立て雨通る

登山杖賣れ殘りたる夜寒哉

登山杖赤蜻蛉の休みどこ

杜の夜を矢車草も寢たりけり

月見草あれば月あり庵の秋

踐みつけて草雪ざゝと知りにけり

藥草もあれば浦島草もあり

一角は南天萩の盛りかな

來年は庭に移さむあづきなし

みこし草提げて林を出でにけり

（以下歸途車中句）

日葵や雲深ふして北に咲く

汙に來て游子の夢や肌寒し

山獨活の花のみ白く暮るゝ溪

眼皮緋なり一千三百尺の天

雲を出て妙義の秋は晴れにけり

松井田は百日紅の花に暮る

麓にはまだ合歡の花散りもせで

里近し森をめぐつて竹の春

碓氷から東夏野となりにけり

麓には秋の梧桐に來らざる

秋の日の磯部に暮るゝ温泉の香り

篝火焚く里や溢蚊多からむ

黑き青き山遠近の秋の夕

山里の秋を破つてダリヤ咲く

山人も花の淡きを捨つる秋

三千尺下りて都塵の秋近し

京の秋野の花語る人もなし

京殘暑しかも鄙居の詩囊あり

車窓より秋見上げたり雲よさらば

秋寒み温泉(ゆ)へ歸りの客右も左も

秋の夜の冷えて取出す魔法瓶

若人の美髪油も照る秋夕日

京の秋塵紅に樹白し

火車の窓開けて都塵に涼みけり

山暮秋都初秋の虫の聲

亂れ鳴く虫の聲行く火車の客

里近く虫の音太くなりにけり

虫の音は廣野なりけり闇の夜の

虫の聲哀れと聞けば哀れなり

鄙居にも虫の音ばかり澄みにけり

鄙居にも蟋蟀われに伴へり

車中飲む茶は清水なりせめてもや

涼しさや京近ふして尿に立つ

闇夜にもみのる稲田の薄白ふ

天が下扶桑の秋を秋と知る

雲を出て芭蕉の雨に歸りけり

(庭前の芭蕉半破れ雨滴我を迎ふるが如し)

北秋、

龍膽の秋に憬憧れて山に入り、碓氷に燒空の紅樹を稱へ、淺間押出に照地の彩霞を踏み、晩秋に浸ること旬日。此の日記あり。

己巳晩秋

宰洲道人

龍膽の秋

（己巳十月十五日京を出づ　小西鄉愁君隨伴せり）

秋晴を鵙鳴くの日に京を出づ（途中）

秋霖の晴れて山翁また雲に（同上）

蓮枯れて小池も廣く見えにけり（同上）

籬咲くコスモスの鄙の花なりき（同上）

莖枯れて芋畑半鋤かれけり（同上）

萬頃の稻秋色を湛へたり（同上）

田の面來て掛稻のみぞ神々し（同上）

秋晴れに雁來紅も持ちなほす（同上）

山家から稻刈る男傭ひ來る（同上）

稻苅や雀隣の田に躍る（同上）

若柿も黄み初めけり納屋の蔭（同上）

松井田の崖に小柿の紅葉せり（同上）

紅葉狩野球に聽いて紅葉見ず（同上）

二千尺上れば下葉やゝもみぢ（同上）

峠路の漆樹紅葉の魁たりな（同上）

絡む木に錦織り込む蔦紅葉（同上）

栗落ちて紅葉半の林居かな

水落ちて石出て初平笑ふ秋（初平は黄初平なり叱石化羊の軸あり）

入庵の宵五位鷺の葦を立つ

路傍の箒草より暮るゝ秋

霜枯れて浦島草の實緋なり

翁來て淺間も晴るゝ秋の暮（淺間笑つて翁を迎へり）

杜面の楢紅葉して樅黒し

霜來り庵の田の面の苅られ行く（稻苅始まる）

肴屋も出來腥し秋の風（常住の肴屋宿に出來たり）

我栗は皆里の子の拾ひけり（栗穀林徑を敷く）

霧の中稻苅る人の聲すなり（晩秋霧ある稀なり）

霧籠めて稻穗の雀庭に來る

杜行けばみこし草皆紅葉せり（草苅られ殘るみこし草の葉紅葉楓の如し）

もみぢ葉を踐む皆みこし草なりき

みこし草紅葉の冴へに摘まれけり

草苅つて龍膽の花出たりけり（龍膽は奥山に咲くと聞きたるも野原路傍にも多く咲けり）

龍膽は野邊には色も褪せて咲く

枯草の中からひよろり烏頭（烏頭赤龍膽と時を同ふして咲く）

烏頭切つて詞友に示しけり

秋色に浦嶋草も數へばや

（浦嶋草緋紅肉種唐もろこしの如く美なり）

霧一日清水の音の疲せる頃

霧雨に漆樹の紅葉紅べとり

野の花の枯れて薊の獨り咲く

鐵笛に稻の群雀庵を掩ふ

露を踐む小川の歩毎鳥の立つ

淺閒晴れ落葉の雨の林居かな

逍遙や盜人萩の着いて來る

（花の頃は可憐の趣あるも其實は困らせものなり）

夏掘りし清水落葉に埋れて

バラス路落葉の徑となりにけり

我鯉は落葉を敷いて落葉着る

暮秋にも此霧あると思はざる

南郊に獵して隣鶉獲つ

（數年以前は一日二三十羽も獲れたるも獵者多く昨今は七八羽位のものと云ふ）

山翁のジャケッに似たる鶉かな

障子明け膝に冷え込む秋に座す

案山子より霧に逃げこむ雀かな

蠅も出て爐邊に一日生き殘る

林木を焚いて詞友と火を談ず

爐を焚いて木の葉の雨を聽く夜かな

みこし草の種を探して歩行きけり

もてなしは終日深き秋の霧

刀執つて鶉裂く夜の雨寒むみ

夏植えし稚楓の紅葉せるもあり

やまべ飛ぶを見たる人あり裏清水

一本の庭の楓に紅葉足る（庭前の一楓紅滴るが如し）

草分けて花一つなし籔虱（杜には盗人萩の方多し）

湯の滾る音を清水に代へて寢る

秋涼に鼠も穴に潜み行く（夏期跳梁を極めた鼠君も何れへか去れり）

栗落ちて栗鼠山に入る林居かな

秋霖に熊迷ひ出て撃たれけり（尚附近に一二匹出るとのことで獵師忙がし）

行秋を芋煎餅に更かしけり

殿は浦嶋草ぞ杜の花

座敷から落葉掃き出す野分かな

茸あり豆腐探しに男遣る

杜の奥行けば鳥立つ落葉かな

掻き除けて又落葉する清水かな

野分の日淺間の烟見ざりけり

野分して尾花の怒濤起しけり

山粧ふ頃我淺間裸なり

霧に來て風に稻苅る男見ず

野分して杜は木の葉の雨の降る

宿の蟲吹き送り來る野分かな

碧空を風に任せて亘る鳥

霧雨の霽れて淺間の黑う見ゆ

棒切で龍膽掘つて歸りけり（龍膽は多根掘り難し）

蔭咲く龍膽花のつく多し

稻塚をひらり〳〵と龍膽拔く（狹山田の岸龍膽多し）

龍膽を根瘤の蔭に植えにけり

烏頭根あるは植えて見たりけり

（烏頭の根は球狀を爲し引けば根ごと拔けるもの多し）

草苅は龍膽掘りと申しけり

龍膽を手に鵞童と語るなる

學童も藤蔓切つて急ぐ里

日表に咲く龍膽の葉も紫紺

（葉も亦花の色の如く風致あり長く室に置けば綠色に還元す）

みこし草種とる原は苅られたり

唐松の杜も櫨の木紅葉せり

狹間田の畦稻塚に通れざる

高原や豆名月も朧にて

淺間晴れ月は北行く雲の中

人馳せて畦の枝豆貰ひけり

（百姓に烟草などやり菽貰ふ。買ふ所なし）

庵出でゝ後の月見る寒さかな

龍膽と浦嶋草彫り後の月

（鑿あり小木片に龍膽と浦島草を刻む）

朧なる月を木の葉の噪ぎけり

後の月なれや忘れて十三夜

此月に翁生れて菽を喰ふ

金風に色ながら散る楓かな

瑟々と葦に聲ありけふの風

夜三更月は西雲は東と別れたり

皓月を清水に映らし見る翁

老樅の梢から月雲を出づ

月を看て堂に上れば骨寒み

後の月澄むを見てから眠りけり

後の月黒き淺間の巨影かな

林徑は今宵落葉の雨の月

露時雨する頃月は霽れにけり

庭に月堂に龍膽咲く夜かな

後の月低きこと三千五百尺

後の月鳴くものたえてなかりけり

高原を繞つて山の粧ひけり

行秋を雲より白き噴火かな

（噴烟の白雲より白きは光線に依るものなるべし）

秋晴れの淺間は筋も骨もあり

（夏の淺間は楚々縹渺たるも秋晴には其趣を異にす）

秋澄んで連山逼り原狹し

行秋を淺間も惜む烟かな

繪にならぬ淺間の秋の名殘かな

（秋晴の淺間美觀色彩の外にあり）

栗茸のうよ〳〵生へる清水邊（べり）

（栗茸の豆腐汁風味佳し）

神詣たま〳〵紅葉觀たりけり

（長倉神社に詣づ）

芹の洲も出來て湯川の水まさる

神橋の暮秋淺間の靈に融（と）く

（長倉神橋に憑つて俯せば湯川の奔湍あり仰げば秋晴の淺間あり渾然亦悠然）

御鳥居に繫ぎし山羊も秋と行く

紅葉山に初茸出たと行いて見る

滿庭の蓬（よもぎ）に霜の來る遲し

苅らで置きし芒も老いて月に伏す

ひよろ紅葉色なさずして散りにけり

龍膽をまた見付けり小川邊（べり）

（小川の下は西洋花屋なり）

龍膽は花屋の花でなかりけり

野薔薇の實赤き崖をば梅擬（モッキ）

花屋にもコスモスの秋暮れにけり（ダリヤ萎れコスモスのみ撩亂たり）

花室は長し三十三間堂よりも（幅四間長さ卅六間ありと云ふ工事中なり）

楓黄に落ちて躑躅の紅葉かな

賓置いて月見むとして尿に立つ

路傍の庚申塚を小菊かな（高原菊を觀ること稀なり）

酒友來る電龍膽掘る野に來る

十六夜は月隱るゝか雲の隱すか

爐の邊淺閒小松も龍膽も

ダリヤより龍膽賞めて宿の人（ダリヤや花魁草などを珍らしがる山人にも此人あり）

爐の榾火とろ〳〵と夜永し

武士道は笹龍膽の紋に在り

天老い地荒れて龍膽咲く

龍膽の花尺取虫の喰ふ（龍膽は虫の附き易き花の如し虫は小さき尺取虫なり）

紅葉喰ふ虫黑綠の斑なり

龍膽の隣に咲くや八雲草（葉菊に似花紫草に類し紫色なり）

爐の火落ち翁も床に入りにけり

蘡薁も紅葉してから切られざる（「ゑびづる」は一見野葡萄に似たり）

三更や十六夜の月翁に牙ゆ

月雲を出てから淺閒雲に入る

前澤の杜龍膽の盛かな（前澤は地名なり）

龍膽を採りに下れば雉子の立つ

龍膽にうか〳〵來たり鶴溜

丹頂の棲みし昔の峽紅葉

烏頭苅られし枝にまたも咲く

草分けて紅溪辿る鳥名なし

滿溪の紅葉翁を迎へ照る

草原の龍膽踐まれながら咲く

水の音あれば鳥あり腹まだら

尾花得て又捨て難し吾亦紅

毒芹の紅葉してから川を這ふ（毒芹も其紅葉せるは捨て難し）

青き鳥川の紅葉の中を行く

餅木通薄紫に熟しけり

（三ッ葉木通方言餅木通と云ふ紫熟風致あり肉は白く種多きも葛餅の如き風味あり）

暮秋かな山の地梨も黄熟の（地梨にて甞て酒造を試みたる者ありと聞く）

秋雨のぱらりと降つて日午なり

龍膽を植えてから降る秋の雨

稲苅と向ひ合せの秋の暮

酒友來るころ秋雨のまたも降る

團菜積む車馬絡繹と驛の道（團菜の輸出時期にて年額十數萬圓に上ると云ふ雨敬氏の賜なり）

有る筈の地梨探して茸を得つ（白初茸多し）

我杜の地梨は人に踐まれけり

家土産は龍膽の花藻に卷いて（妻龍膽と浦島草持ち歸京す）

三ッ葉木通亦藥草と申しけり（高原の草果殆ど藥用ならざるはなし）

前の田は今日稲叢となりにけり

色鳥に我杜かさむ山枯れて

稲苅つて澤瀉數へ見たりけり（清水寄りの稲田澤瀉多し）

秋雨に歸る人あり來るもあり

拜殿の屋根六尺の紅葉かな（長倉神社拜殿は茅の屋根なり雑木生ふる中を楓紅葉せり）

秋雨は山に來てから時雨なり（時雨と見ざれば四圍の風物と合はず）

客泊めて一日は山の時雨せり

山に折る紅葉池邊に挿されたり（詞友兜山の紅葉を手折り來る）

櫨の實を拾ふて客も神詣（櫨の實三角形を爲せり）

長倉の杜も黄みて川時雨

紅葉狩翁は黄葉に興しなむ（黄葉の味は蠱惑の如し）

蓼科は霽れて淺閒の片時雨（蓼科山は西南に聳え高さ淺閒と髣髴たり）

小淺閒も淺閒もけふは夕時雨

秋行かむ稻扱ぐ人の來る遲し

掻けばまた散るものなるに掻く落葉

落葉掻き焚くほど寒くなかりけり

爐の火跳ね話途切るゝ夜半かな

爐を焚いて火を見て客の語りけり

龍膽は爐に紫のあせやせむ（同時に切り室外に在るものは生氣盛なり）

爐の火落ち嘘して寢る夜半かな

桑畑の露蹶つて立つ雉子二十（客の觀たる所なり）

月おぼろ雜木林を五位の聲

月朧なれや林の鳥靜か（利我の觀念は取り去り離きものと見ゆ）

夜寒う月觀ぬ月は朧なれ

龍膽の秋の夜寒を寢たりけり

小淺閒は抱かれて寒き淺閒かな（峠より仰げば小淺閒山は淺間裾野の襞に纖り込まる）（以下十三句碓氷行）（同上）

紅葉谿樅の梢は妙義なり

紅葉狩妙義榛名を右左（秋晴展望廣し）（同上）

紅葉狩寒さに力むり力餅（同上）

桃色に檀も交る紅葉かな（檀の實は落霜紅に似て包皮桃色なり）（同上）

權現の鳥居に憑つて紅葉かな（同上）

峠にも淺間颪の肌寒むき（同上）

日時計や峠の紅葉日午なり（權現日時計の石あり）（同上）

栗の實の搖ぐは猿の惡太郎（學童の觀楓多し）（同上）

山もみぢ上毛の野は尙みどり（同上）

禰宜の住む茅の屋根を紅葉かな（同上）

鼻紙に碓氷河源の秋寫す（方一丈斗りの溜二個を作り飲料水を酌む所とす）（同上）

水源に紅葉流して見たりけり（同上）

木通取りに立たず紅葉の畫半（客來り誘ふも翁は碓氷の紅葉描くに夢中なり）

此秋を三ッ葉木通に別れなむ

今日切つて浦嶋草もなかりけり

點心は今宵三ッ葉木通なり（客も餘り手を出さざりしやうなり）

秋の花盡きて庵閉づ用意かな

淺間肅たり尙金風の帽飛ばす

行秋を算盤柿のなほ青き（土屋君の畑に此小柿あり澁柿にて黃熟せず瓶に挿して雅味あり）

爐消えて聯珠の柿の夜寒かな

堂に入る小鳥も去らぬ夜寒かな（小鳥室に入り追へども去らず鄕愁君と共に捕へて笊に入る）

笊に入れ爐邊に小鳥置いてやる

霜に起き先づ聞いて見む何の鳥

花といふ花皆爐邊に挿されたり

爐の火あるまで小鳥奴に寢ざりけり

我小鳥音立てずして霜夜寢る

小鳥ある今宵は月を見ざりけり（小鳥にさわぎ月を忘れたり）

雨戸打つ音や木の葉の雨ならむ

三更の淺閑颪に呀ゆる月

暖めて鶯杜に返しけり（室に入りし小鳥は鶯なりと土屋君の鑑定なり）

手の届く枝に鶯去りやらず

山羊白く尾花も白く樺白し（以下廿五句押出行）

媼あり紅葉の峠米負うて（同上）

楢もみぢ淺閑の裏は緋なりけり（楢は黄葉を普通とするも裏淺閑には紅なり）（同上）

芒交り六里が原の草もみぢ（同上）

裏山も其荒涼を粧ひけり（同上）

熔岩も躑躅葡萄の紅葉かな（同上）

紅葉して淺閑葡萄の多かりき（同上）

熔岩の秋を磨いて岩鏡（岩鏡赤稍黒味ある紅葉を爲せり）（同上）

林分け苔皆甘露梅なりき（甘露梅は方言なり「コケモモ」又は「ハマナシ」などと稱するものの是なり）（同上）

甘露梅赤き實あるを掘りにけり（同上）

紅葉して押出の春來りけり（押出は夏景却つて荒涼なり）（同上）

一畔や枯野六里に秋の行く（同上）

降灰に裏山白し秋の雲（九月十八日爆破の跡歴々たり）（同上）

地に敷いて黒豆の木紅葉せり（方言淺閑葡萄と稱するものクロマメの木なり）

落葉焚いて瀧の水煮る晝餉かな（石止瀧の水汲み來つて押出に煮る）（同上）

山の秋なれば齒に浸む梨の味（二十世紀も齒に浸みて冷たし）（同上）

秋風の棲むに任せて吾嬬茶屋（岩邊の茶屋隻影なし）（同上）

草枯れて拾ふ熔石新なり（同上）

行秋や噴火に荒るゝ峰の茶屋（峰の茶屋屋根をコンクリートに塗れり併も可なり破損せるを見る）（同上）

雪霧に命拾うて茶屋の客（同上）

霧の敷く毛布に登山の日待つ客（同上）

芒枯れ石の地藏も寒からむ（同上）

石止の瀧も紅葉に暗からず（同上）

地藏川たからかうう枯れ水疲せて（同上）

地藏川此處にも浦嶋草の咲く（同上）

賓去つて芹の水音また閑こゆ

畫は堰取つて落葉を流しけり

熔岩に拾ひし日書く秋の暮

堰取つて落葉の堰の出來にけり

淺閑晴れ雲は西へと秋の暮

落葉して小淺閑山も坐して見ゆ

半日は岩鏡なんど植えにけり

煎殼清水に投げてみこし草

落葉して鳥我杜につとひ來る（我杜の樅落葉せず諸鳥集ひ來る）

落葉して小池の水の流れざる

岩這うて秋の句を書く筆落す

色鳥に名を知らざるの恨あり（鳥の研究も必要となつた）

秋を樅亭々と鳥の杜

行

曇る日の樅を鴉の杜に啼く

秋行いて忙がし庵を閉づる人

稻苅つてまたも鶺鴒田を叩く（夏より初秋頃に來るものとは羽色異るが如し）

庵閉ぢる忙中秋の間句あり

田を繞る杜夕陽の紅葉かな

行秋を既に枯木に烏あり

老樅の枝から枝へ鶫の啼く

鶫鳥も來りな未だ庵閉ぢず

尾花散つて原には花のなかりけり

杜分けて行けば檀の紅葉かな

檀あり七竈また植えて見む

（七竈は喬木にて葉漆樹に似て櫻ン坊の如き實あり葉共に紅を成す）

うら枯れて鶉鳴くなり日毎々々に

押出しに日蔭の蔓見たりけり

（昨年御大典の節初めて此蔓を見たり）

茶を飲むで茶の花知らぬ人もあり

杜行けば木の葉の衣着て歸る

蟋蟀も來り爐邊の薪を這ふ

行秋に自慢の酒を振舞へり

（山に不相應の酒あり友人の割愛にかゝる）

菊觀むと遙々山を下りけり

鈴蘭の紅果稱へて夫人かな

もみぢ葉を除けて苔桃、植えにけり

押出しの苔を土產に下山かな

風落ちて今宵は爐火を聞きにけり

爐にくべる生木も秋をかこつなる

みこし草盡きて翁の下山かな

淺間ありしかも爐邊にエトナ說く

灰になる爐火を生木の燃え難き

淺間澄み稻田は霜の白う置く

霜踐んで用聞の來た聲すなり

秋の日に蛇穴を出てくねる見る

（前澤の杜小蛇を見る）

小春日の淺間左肩に畫の月

狭山田の秋の果しを畫の月

紅葉せるみこし草また摘みに出る

みこし草尚あり庵を閉づ早し

櫻蓼老樅の根を紅葉せり

蒟に見て摘むみこし草綠あり

秋曉を烏烏より啼き初めて

火車躍如路邊の芒散らし飛ぶ

小春日や東西南北鳥の聲

我杜は小春の鳥の棲む所

厚朴の木の落葉も踐むで見たりけり

厚朴葉踐む音の谺に冴えかへる

みこし草摘む前澤の午さがり

藥草を摘むで憩へば地梨あり

枯草の中を這ふたる地梨かな

みこし草是程あらば種取れむ

林居にも句にした人も來る小春

此手跡ある人逝けり秋今年

（甘泉堂主人來り故田中男手跡の鑑定を請ふ）

本間殿鶉を提げて庵叩く

爐の別れ五十八度を焚きにけり

擲げ捨てし根瘤を焚いて爐意あり

淺間苔提げて林居を出でにけり

分去れの原の小松も伴へり

田の面なる鳥も時雨れて杜に入る

さなきだに時雨の落す落葉かな

下山する朝から野山時雨れけり

夜毎來る五位は小鯉を啼くぞとよ

翁去る日から時雨の植木守る

鶴溜行くべかりしを時雨れけり

時雨して埋火なほも爐に殘る

稻叢の雀も時雨れながら鳴く

時雨るゝや烏明神おわしまし

柴門を出でむとすれば雉子杜へ

裾野まで淺間を隱す時雨かな

むら時雨傘かる案山子なかりけり

霜の來て鳥の林となりにけり

時雨るゝや里秋雨の降るならむ

時雨して杜さび鳥の聲淋し

獵に出ぬ隣の犬の時雨かな

我杜は烏の噪ぐ時雨かな

稻塚の尙在り霽れよ山時雨

里の子の五々三々と時雨れけり

山の秋疊む翁の頭陀袋

時雨るゝや小鯉も落葉跳ねて飛ぶ

名殘をば淺間時雨に留めて立つ

（淺間咲つて迎へ泣いて送る）

餅木通地梨折添へ腰に在り

（浦鳴草、龍膽、落霜紅、算盤柿、八雲草等皆帶溜に捨て歸れり）

一汽車を延ばし茶もなき時雨かな

枯野から來て草の里尙みどり

紅葉狩もみぢ見ずして時雨けり

雲を出て峠も雲の夕時雨

時雨來て熊の平はたゞの雨

見えぬほど妙義は降らぬ時雨かな

萬斛の秋雨都塵を流しけり

翁歸る夜を秋雨の洗ひけり

鄙店して尙龍膽の瓶にあり

（己巳十月廿五日夜歸京せり）

宰洲句集

塵埃、荒草、落葉と戰ふのが道人發明の不老長生術の一なり。句は按摩なり、不斷之を用ゆれば利目なきものと知るべし。

己巳晩秋　　宰洲道人

苔班梁塵

京に見た月十六夜に庵に入る（己巳九月十八日稚松庵に入る）

閣魔橋渡れば月の淨土かな

滑川の月に聲あり海の音

庵閉ぢて松葉牡丹も出ざりけり（滿庭の松葉牡丹殆ど無し）

高原に汝も咲いて日照草

一輪は翁に咲いて日照草

野に聞きし虫も今年は籠に啼く（人家建て籠めて鈴虫など聞きし野は市街となれり）

塵三日はたいてからの庵の秋（應接間のブラインド猫に裂かれカーテン虫に喰はる）

老鶏に蔭をかしたり白木芙蓉（老鶏五六羽あり羽毛雪より白し）

棒がらに葵もなつて折られけり

間引菜に一杯多き茶漬かな（畑僅かに一畝の菜蒔かれたり）

多に枯れ熊笹の春なかりけり

水蓮は錢大の葉に殘りけり（三鉢の水蓮皆咲きし跡なし）

色鳥も家建籠めて鳴かざりき

積み上げし松葉に喞く虫の聲（半歳の落葉積んで山を爲す）

蟋蟀を附けて芋屋に松葉やる

草の秋鎌半年の鏽落す（刄物盡く錆びたり）

食刀磨いで坐れば皿に秋の蠅

松葉掻げんなりとして月逸す

畑荒れて馬齒莧のみ黄なりけり

三尺を實生櫻櫚の茂りかな

芝ほけてたゞ白木芙蓉のみ殘る

白粉の花節々に折られたり

掃溜はコスモスくねり隱したり

垣を被ふ蔓を手繰れば荔枝かな

枯れかゝる八ッ手見直す秋の雨

雨を得てから鯉も泥を出づ

秋晴や今日は翁の土用干（何もかも唯黴臭し）

散策の風黴臭き袷かな

立ち枯れて山獨活庭に苅られけり

翡翠を池に見てから十五年

短冊を掛け替へて見る殘暑かな

障子張來る夜寒まで延ばしけり（此處にも鼠君跳梁せり）

半鐘に三更の虫聽きにけり（山の手火事あり戸外に出でゝ見る）

糸瓜なき今年は日覆とる早し

去年とりし布瓜の水も盡きにけり

鴫に聞きし秋浪音もなし

松風を立てゞ秋雨しとゞ降る

松葉搔く手に秋の句の夜半かな

苔の乘る鰻釣られて放たるゝ（小供池に鰻を釣つて青苔の生へたるを見て氣味惡るがつて放ちたり）

初茸の生へし跡なりそつと搔く

庵の紅一點の楓五六尺

地割をば氣をつけて掃く松露かな

頰被してから門に落葉搔く（田圃の中の一軒家たりし頃は裸で松葉搔きせしこともあり）

錢苔に花壇敷かれて仕舞ひけり

百合根賣住む里聽くを忘れけり（毎年夏必ず來る百合根賣秋に來らず）

戸の隙間から蔓さし入れて蔦紅葉

草取つて茄子と胡瓜の出たりけり（茄子も胡瓜も喰へたものにあらず）

トタン屋根打つ秋雨のぎよう〳〵し

打つ音にころりと落ちる秋の蝿

秋の蝿なれど蝿打備へたり

秋の蝿飛ばざればこそ打たれけり

秋の蛾を止まらせて見る袂かな

故紙から自畫拾ひだし夜永かな

記者の來て秋を聞かずに歸りけり

秋雨に色紙探して歩行きけり

句ある毎筆洗ひけり秋の水

雀痩せ里の小雀となりにけり

此頃は鳥にも呉れぬ落穂かな（世の中はせち辛くなれり）

永き夜を見佛問法と謠ひけり（念佛と問遊へるものあり）

大蚯蚓落葉と共に掻き跳る（大き過ぎて鶏に呉るゝを忘れたり）

鶏の糞一荷は薔薇に呉れてやる（半年の鳥糞仲々掻きであり）

落葉掻く夕松茸來りたり

秋茄子自慢に持つて來る翁

鴉より後れて五位の啼き亘る

家賣つて椎の實生るに木若し

冬青をば苅る「秋蜂に螫されざる（夏毎に蘭を苅つて能く蜂に螫されたり）

松延びて冬青の籬所々に枯る

松葉焚いて色なき風の白ふ吹く

丁卯に挿した無花果實ありけり

若木の實なれや無花果青ふ落つ

蛇穴に入る頃笹は苅られけり

蛇穴に入つてから棲む蟹もあり（池邊蟹多し）

無花果の葉を蔭干にしたりけり

鳥屋の前なれやコスモス抜かれたり

コスモスも丈の低きは抜かれざる

落葉掻いて鳥屋出し鶏の牝を呼ぶ

稲苅つて雀も庭に見らるべう

書債をば並べて庵の夜永かな（依頼者の分らぬもの多く氣の毒なり）

短冊に呵筆して見る夜永かな

痩せ蚤の翁と知らぬ夜永かな

蚤に寤め酒に寝ねたる夜永かな

みこし草飲む秋暁の茶の香

蚊の殖ゑて後の彼岸の後れたる

芝生には流石に露の時雨せり

地に委して木蔦の鉢の取ればこそ

搦みつく隣の豆の珊瑚樹かな

初夜の鶏秋の夜永を啼きにけり

鳥屋掃いて翁涼しくなりにけり

鳥屋掃いて汗吹く風や草雲雀

馬追も老いて夜燈の笠にあり

蜀螻(しょうりょう)の鳴(ツクツクボシ)くには松の茂りかな

月老いて十寸穂の薄だらり垂る

五味子(サネカヅラ)切つて實もあり惜みけり

鯉魚風(ギョフウ)の吹くときなるに鯉痩せて

秋空を三繞り鳩の歸り行く（小供來り傳書鳩を放つ）

落葉掻く腕に喰ひ入る籔蚊かな

草むらに三つ四つトマト秋緋なり

落葉掻く熊手にころり蝸牛(カタツムリ)

蘆の穂の錦を海に入る日かな

菊の酒酌む人今やなかりけり（已已九月廿九日朝田中男蕉去の電話あり倉皇歸京す）

秋霖に噫泰山は頽れけり

千代見草秋淺ふして枯れにけり

曼珠沙華(マンジュサケ)櫻の堤染めて咲く

巨星殞ち涕泗紛たり秋の雨

挽句書く筆の亂れの秋悲し

夏植えし芭蕉は既に二三芽(ガ)す

芭蕉葉を芋がら切ると思はざる

これも野の花と花壇の蓼(タデ)とらず

種蒔きし柿の實今年一つあり

一輪は檀(ダン)特(ドク)の花紅に（今カンナと云ふもの是なり）

破れ芭蕉四五枚切つて夕日あり

藥草と聞いて龍舌蘭(リュウゼツラン)分ける

蘭枯れて根をベコニヤの咲きにけり

若柿は葉の紅葉する後れたり

みこし草種跳ねる音パチリ〳〵

みこし草小種六尺彈け飛ぶ

一畝はみこし草の根挿して見る

みこし草植え竹立てゝ繩を張る

夏挿したみこし草の根一葉せり

栂(ツガ)櫻(ザクラ)苔桃(コケモモ)なんど淺間苔

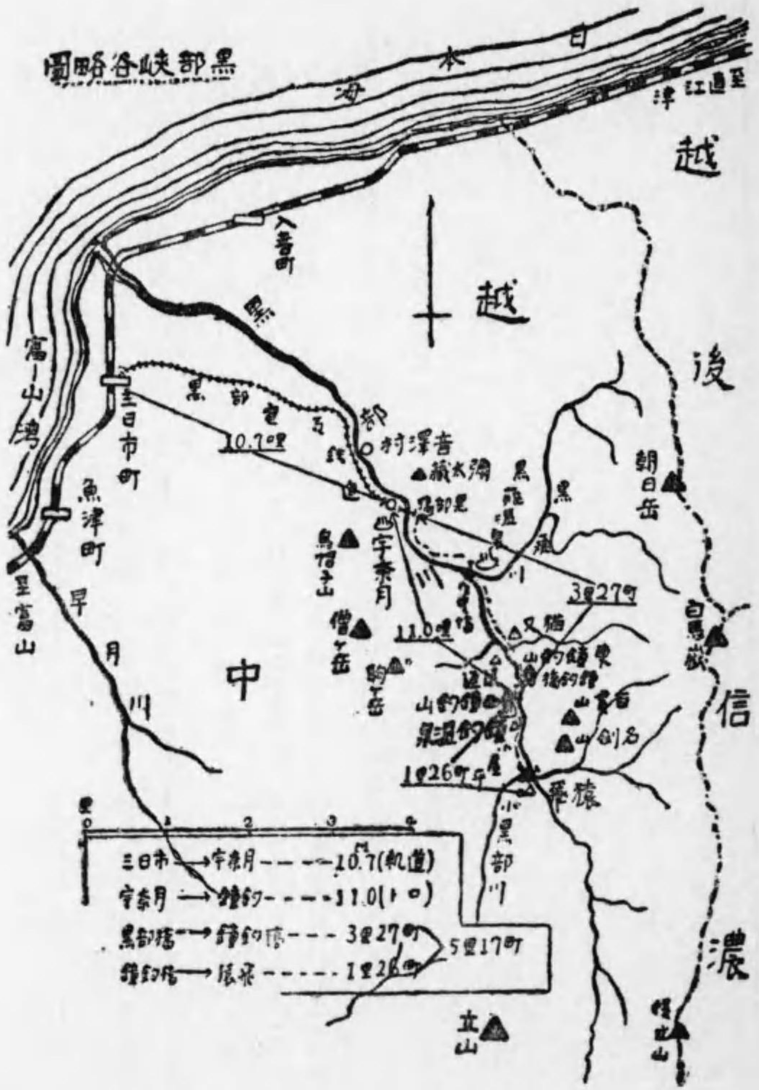
子供等も一つ生る柿神饌に

中國哲學

『中越の三日』は黒部峡谷を訪ひたる時の日記で今日まで門外不出にして居たが、爾汝會で黒部探楓のことにも言及してあるので、謄寫の代りに印刷に附することとした。

昭和辛未初夏

宰洲生



中越の三日

其の一日

朝八時宇奈月を發し、トロ觀楓の客となる。黑部橋を渡る頃雨止む。

宇奈月を時雨に拔けてトロ三里

博物學に蘊蓄深き峽通吉澤君東道せらる。民有山林に屬する喬木多くは伐採されたるも、橡(とち)の木のみ切り殘されて、其の黃葉亦美觀なり。

橡の木の切り殘されて木の實あり

黑部峽谷は、東に白馬岳の連山あり、西に立山の靜嶽あり、所謂北アルプスと稱せらるゝ峽谷で、海拔一萬尺の疊嶂を縫うて、黑部の激湍約二十里を吼え下る。其の風物の雄大なるは想像の外なり。

立山と紅葉挾んで白馬かな

雪の水紅葉に狂ふ小二十里

秋の山粧ふは殊常事なるも、峡の山岳盡く紅に、僧眼の緑、佛頂の青、其の間に參差して、殆ど色彩を絶す。所謂山粧ふとは是なるかなと初めてうなづかれたり。

還暦に初めて山の粧ふ見る

幾疊の山盡く紅葉なり。白雲の所々に之を縱斷することなくば、唯一面の黄屏と見む。

谿十里紅葉を截つて雲の立つ

千丈を仰げば紅葉俯せばまた

雪の川委蛇たり蜀の錦着て

兩岸を粧ふ纈纈に、たゞあれよ〳〵とばかり、黒部の奔湍白馬も眼に入らばこそ

粧ふ山看て水觀るを忘れけり

兩岸の木草、之を吉澤君に問へば、答ある馨のものに應ずるが如し。

山粧ふ木の名草の名問うて見る

軌道トンネル多し、風致を害せざる爲めといふ。眩暈を感ずる如き紅葉に目を休めて

却てよし。

墜道を入つては出でつもみぢかな

所々に、去年の雪、灰色に殘るを見る。

峡を覆ふ紅葉に燒けて去年の雪

兩岸點々杉の植林あり。黒部杉と稱して、峡の名産なり。

杉林此處にも蔦の紅葉せり

後曳橋は、黒薙川の黒部川に合流する地點に懸る。此川大蛇の傳説あり。黒薙温泉あり。温度頗る高しといふ。

大蛇斬る黒薙川も紅葉せり

猫又（ねこまた）は鐘釣（かねつり）發電所の在る所で、水湛えて淵を爲す。對岸鼠返（ねづみがへし）の丹崖碧潭に映ず。

小岩魚（いはな）も紅葉の下に淀みけり

鐘釣橋を挾んで東西鐘釣山あり。山骨盡く現はれ、其の狀梵鐘を伏せるが如く、頗る奇觀なり。

此紅葉鐘釣山の鳴りもせで

釣鐘の龍頭にちらと紅葉照る

宇奈月より約十一哩斗の所にてトロを捨て、黒部の釣橋を渡る。脚下紅葉の搖ぐを見て橋のゆるぐを知らず。

釣橋や紅葉も搖ぐ二百尺

目藥の木は喬木にして三つ葉なり。其の紅葉殊に美なり。木の皮を煎じて目藥と爲すと云ふ。

目藥の木紅葉の中に紅葉せり

東道は薄紫の漿果を結ぶ濫木を手折つて、これは紫式部と云ふ木なりなどと、其の通を振廻はせり。

萬紅の中にあざみの秋もあり

秋闌けて殆ど草花を見ざるも、稀に野薊の咲けるあり。

榧の實の尙在り小猿見らるべう

峽に榧の木多きも、松榧の類を見ず。

どれ〳〵と鼻うごめかす木黒文字

楊枝の原料とする黒文字の木又は讓り葉の木等も、所々に見受けられる。

讓り葉や石楠までは小牢日

立山に閑古鳥多し。明治二十六年登山せる時、一羽を獲て、友人子規に土產にせんと携へたるに、道に踐み迷ひ、途中食用に供せしことなどを聯想せり。

人臭き谿には下りず閑古鳥

小屋平は、峽中稀に見る小平地にて、電力會社の派出所あり。野天に茶を呼ばれながら紅葉を稱へたり。

一碗の茶に又紅葉見直ほせり

斷崖を辿り、崎嶇を攀ぢ、鐘釣橋より徒歩約一里斗にして猿飛の奇勝あり。此處峽邇り、兩岸の丹崖相擁して猿の飛びかふより此稱ありといふ。老楢あり三四圍黃苔幹を包む。樹に憑つて此奇勝を瞰下す。

老楢の黃ばむ潤底草黃む

飛びやらで小猿の散らす紅葉かな

峡の紅葉は、天狗の羽團扇と稱するもの多しと、又雪の下に類似せる大和團扇多く、淺間高原にて岩鏡と稱するものにて、其の紅葉見事なり。

踐れじと大和團扇のもみぢかな

猿飛より引返して、鐘釣温泉にて中餉をしたゝめ、名物岩魚を試む。精々七八寸位のものかと想像したるに、一尺二三寸もある大魚に案外せり。鮠魚、鮎、やまべ等に比して肉軟かに、風味乏しきが如し。

膳引いてまた酒を呼ぶ岩魚かな

温泉旅館の向岸には百貫、名劍の二山、畫屏の如く兀立す。二山共に一塊の巖巖にして、創立一千メートルと稱す。一面の紅葉は、霞壁丹崖などの形容を絶す。

羚鹿も踐みし跡なし敷く紅葉

旅舍より河崖に下る二百尺、岩窟あり、熱泉沸く。冬期には猿の群れ來りて暖をとるといふ。

岩窟や紅葉に湧ける温泉の烟

其の二日

宇奈月の旅舍に在りて朝十時頃より、終日百數十枚の揮毫を爲せり。揮り書きも流石に稍疲勞を覺えたり。

筆摑いて肱を枕の時雨かな

逆旅二百尺の崖を下れば、社營の大プールあり。プールの土手を辿ひ下り河岸に出れば、雜草の中に檀伏して紅葉せり。

對岸の紅葉に下りて檀あり

山時雨凄まじく、風これに添ふ。黑部の川時雨も流石に屏息し、木の葉の雨は、皆凄天して一の奇觀なり。

彌太藏の紅葉吹き來る戌亥風（彌太藏は山の名）

紅葉葉は空へ〳〵と吹かれ行く

川時雨山時雨してやみにけり

やがて鳶一羽來つて河原を舞ふ。

山時雨鳶も木の葉と河原舞ふ

宇奈月温泉は、對岸黑薙より約二里斗を延けるものにて、好適の温度を保てり。一浴

清涼を覺ゆ。眞子白子の鰻鯊に微醺して、地方名物の話などに打興ず。

子うるかをなめて時雨に聽く夜かな

夢今宵木通の浸し獨活の汁

川音の潺々たるに寢られぬとかこつ人あるも、我は却て安眠せり。

宇奈月の川の時雨に寢たりけり

黒部河口附近の地は、昔最妙寺時頼が佐野源左衞門に與へた櫻井庄なりといふ。

長へに常世が庄の山粧ふ

某氏より、自から山間に採りし黒部栢を贈らる。

漢栢の壽を三尺に秋の暮

其の三日

宇奈月の背後に僧ヶ岳あり。山高からざるも、頂上既に雪を戴く。

淡雪や翁見返へる僧ヶ岳

宇奈月を下る數丁、對岸に音澤村あり。平家の後裔と稱して、其の習俗を異にせりといふ。紅葉よし。

赤旗は平家なりける紅葉かな

峽の紅葉に眼も爛れ、里の柿緋に興味も沸かす。

家あれば柿あり下る川三里

遙かに立山を顧みて、三十六年前の感興やまず。

昔我驅けりし山も時雨けり（驅けるは方言登山のことなり）

魚津の海岸に車を止めて、蜃氣樓を語る。

蜃氣樓立つてふ浦の片時雨

入善素封家米澤氏の宅に少憩、芭蕉翁肉筆幻住庵の記を觀る。珍物なり。

桃青の庵記に秋の別れ行く

繆藝

詩曰緜蠻黄鳥。止二于丘阿一。道之云遠。我勞如何。飲レ之食レ之。教レ之誨レ之。命二彼後車一。謂二之載レ之。と、吾輩の緜蠻として鳴くは、こんな深い意味があるのではない。唯鳴いて居るのである。恐らくは、此の鳥の聲を聞き分ける人は無いであらう。

昭和辛未梅雨の夜

宰洲識

緜蠻

豐年を祈る社頭の雪五寸（御題社頭の雪）

吐火仙を呼んでこようぞ此苦寒（嶋島逆旅に疾患を養ふ）

元亮も腰折るけふの寒さかな（同　上）

あせるほど腰重くなる雪の空（同　上）

注射して三日は夢の小春かな（同　上）

たぎる湯の音ゝらさむき寢覺かな（同　上）

一齋が書幅にかほる蘭の花（同　上）

寒の汗四段の人の腰を蒸す（同　上）

螻蛄藏る月白川の關の虹（嶋島よりの歸途白川の關にて）

班超も老いて蟋蟀見る關の外（同　上）

大茗を探がす虞洪や呼子鳥（尋牛の圖）清居禪師十牛の圖の一

くだら野の苔に印する何の跡（見跡の圖）同　上

落葉して尾上の松を見上げけり（見牛の圖）同　上

手綱をば唯頼みけり雪解路（得牛の圖）同　上

牛も飲み我も掬ふや春の水（牧牛の圖）同　上

鶯も馴れて糞する膝の上（騎牛歸家の圖）同　上

薇摘むことも忘れて拳を竪つ（忘牛存人の圖）同　上

長閑さに砂に輪を書くお僧かな（人牛俱忘の圖）同　上

鳥も鳴き花くれなゐに山咲ふ（返本還元の圖）同　上

春風に酒旗翩翻と流れけり（入鄽垂手の圖）同　上

初春の茗に南零の水汲まむ（茶經を讀む）

籠置いて櫃を摘む谿や子規（同　上）

蔭の枝を栗鼠と飛び交ふ丹丘子（同　上）

我庵の茸も沸きそめて鐘かすむ（同　上）

梅景の茶を誹るあり梅咲くに（同　上）

習々と紅爐の上の吹雪かな（同　上）

初空や初平も醉うて羊追ふ

目出度もなしと愚僧の屠蘇の醉

元日や天神地祇も君祝ふ

和漢洋こねくつて見る雜煮かな

自動車も輪かざりかけて御慶かな

人生の歡樂鄉やいものかみ

不景氣や少さくなりし松かざり

初鶏は雪や氷と鳴きにけり

初風呂や橙入れて腰をのす

薺粥今年も減らぬ翁かな

東風吹くや芙蓉の花殼からり〳〵

初鶏は若き隣の鶏なりき

初花や終日黄老讀み耽る

三翼の舟下り行く霞かな

凧や雀角あり蛇に足あり

蓬莱や苦桃千里も及ばざる

春の川まだ源は凍りけり

離婦州に住むも柳はやなぎかな

張翁も鄭婆も見えぬ花今年

早蕨や我鬢髪のいつまでぞ

畑打や土牛石田何のその

默々と暮れかゝる日を眺めけり

末世とて虎晴の人の花見かな

母喰ふ鳥あり五色の花見せむ

甎を磨す野僧が菴や蕗の薹

春の夢盤陀の石を研ぎつくす

梅咲いて窓を明けゝり百無能

仙藥を探せば鳥の古巣かな

定名の橋を戻るや野老堀

竹の皮しやぶる小狗や梅日和

蓬莱と飯瓮とあり鼠曇

長閑さや禪師終日米を搗く
靜かさを何處に求めむ春の水
暖くなれば蚤出る法衣かな
長閑さも柳ばかりは亂れけり
谿谷や若草萠えて石斑
砂を蒸し餅となさばや庭かまど
畑かへす夜は五行見る讀書かな
猫の戀虎頭の枕に通ひけり
鶯の琴聞かせ申さむ爐冶の人
繩投げて春風繫ぐ影法師
鵠鴒の石を叩いて音もなし
霞喰ふ人十かへりの花に立つ

噫三萬六千日もおぼろなり
人あり白牛を呵す月おぼろ
山居にも五加木摘む人なき世かな
白鷺のおり直しけり蘆の角
百までは夢を寄居虫と分たなむ
糸遊や隨時々々と僧の聲
節分や無明の鬼の逃げどころ
瓢鉢に蚤飛び込むや日麗
齒固や寒山の詩六百篇
幾度か盲驢のくぐる注連飾
豆撒きや福も見ざれば鬼も居ず
まつ黑に地藏もなつて燒野かな

山焼いて鹿の角をば見つけけり
あの雁はいくつ戻るか天の原
飯蛸や五百萬石そちにやる
古城の角とりまはす柳かな
枝ともに梅の蕊蟲落しけり
梅今年住寺の眉に霜深し
寒山に喰はせて見たし海苔の味
びりとする雪解の水の山葵かな
蘆の芽の延ぶをにたりと達磨かな
長閑さに達磨も皺をのばし見る
傳燈の燃ゆる達磨の臍寒し
猫の戀讀誦の聲もちと濁る

菊分けて何時も花見ず仕舞ひけり
里の子の手鼻かみ行く野梅かな
梅が香の互るやわたる谿細き
川風にあほられて咲く梅早き
足許に小狗もつるゝ梅見かな
大雪や夜半古木の裂くる音
落雪の音に目覺むる夜寒かな
雪晴れの空飛行機の低う吼ゆ
雪を嚙む男浪女浪の音かすか
蒼蠅も凍つてころり落ちにけり
利鎌月白面郎の息白し
我影も痩せて地に敷く梅日和

大鷲の羽敲く音を吹雪せり
鬢の霜今朝は目立たぬ銀千樹
玉鞭の音も拔け行く桃林
乞食も梅も咲ふや納屋のかげ
石に苔乘り初めにけり春の川
霞喰ふ人に吸はせむたばこ草
雪晴や斜陽の鴉紫に
椽側の豆腐凍りて月若し
塒とも雪に埋るゝ雀かな
筏から家鴨見上ぐる若葉かな（某氏庭園）
曇る日も牡丹ばかりはくわつと咲く（同上）
下り藤梢々とのぼり咲く（同上）

廣澤が書に初夏の夜も靜なり（同上）
虎杖や全園の野趣背負ひ立つ（同上）
うか〳〵と梅が香辿る被衣かな（畫讃）
花吹雪向ふの岸へ渡りけり（同上）
子規一聲低し宇治の月（同上）
大鯉や天の衾を蹴上げ飛ぶ（同上）
玉花散る青葉もみぢの戰ぎかな（同上）
簫澄みて月行く雲の足早み（同上）
雲も浪も月團々と驅けぬけて（同上）
白烟の委蛇たり杜はもみぢして（同上）
鷺立つや裾野のすその枯野原（同上）
爐にかざず興輕法師の雪の袖（同上）

大名も知らぬ若葉の七曲り（大井川）

禪寺に勅千年の風かほる（平田寺）

やがて乘る阿闍梨の蓮の若葉かな（櫻ヶ池）

船頭に川根茶呼ばれ涼しかり（大井川）

歌一つうたふ暇なき茶切りかな（牧の原茶園）

句帖

これは昭和辛未應鐘奈良に居る娘夫婦から案内されて、一平民として桃山の御陵に參拜し、功臣鎌足を祀る談山神社に詣づるの外、觀光數日の日記である。

『何れの草か黄ならざらん。何れの日か行かざらん。何れの人か將いて四方を經營せざらん。』とは小雅の詩であるが、此日記を「何草不黄」と名付けた譯は、吾輩のみの知ることである。

瑟々金風起るの夜

宰洲識

何草不黄

春日奥山周遊道路に自動車を驅る。中程營の瀧あり。小溪の稚楓靄く紅葉せり。曾て遊ぶの日、野猿の嬉々として戯るゝを觀たるも、其隻影を見ざるは聊か物足らぬ感あり。

鶯の瀧に消ゑ込む紅葉かな

里近く猿も出でけん柿の秋

正倉院の御物を拜觀、其の優越豪富なる實に世界的の珍寶と稱すべく、我國體の精華を發揚して餘あり。

菊作る國に生れて御物かな

千年の御物に菊の香りかな

松風の時雨も御稜威たゝえけり

千三百有餘年を經過し、飛鳥時代建築の精髓たる法隆寺の傑閣雄麓は、高德の聖者に